

浅川扇状地遺跡群

# 二ツ宮遺跡・本掘遺跡・ 柳田遺跡・稲添遺跡

—第1分冊・長野市稲田徳間土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—

1992・3

長野市教育委員会

## 序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の始源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび長野市稲田徳間土地区画整理事業にともない、浅川扇状地遺跡群二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡の4遺跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で貴重な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でもそれぞれ多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第47集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成4年3月

長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄

## 例 言

- 1 本書は長野市稲田徳間土地区画整理事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野市稲田徳間土地区画整理組合の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市大字稲田、同大字徳間に位置する。遺跡名については第3章にてふれる。
- 4 本書は矢口の指導のもとに千野が執筆・編集したが、第5章1は飯島が、第5章2は出河裕典（長野県埋蔵文化財センター）が、第5章3は原田和彦（長野市立博物館）が、第5章4は森泉がそれぞれ執筆した。
- 5 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 6 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。

資料掲載の要領は下記の通りである。



・資料は検出されたものの中から、時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。ただし特殊なものはこの限りではない。時期・性格等不明瞭なものは資料掲載の対象から外したが、これらに関しては図面・出土遺物等閲覧し得るように保管してある。

・遺構・遺物は各時代ごとに記述した。各時代の中においても時間的前後関係のある程度考慮に入れて記述したため、遺構等の検索が煩雑になった部分もあるがご容赦願いたい。

・遺構番号は調査時に用いた仮番号を、報告に当たって再整理しており、またすべての遺構を掲載しているわけではないので必ずしも通し番号にはなっていない点、ご理解願いたい。

・遺構の測量は物写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1:20の縮尺で基本図を作成し、本書では基本的に1:60の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものに関してはこの限りではない。

・遺物実測図に関しては基本的に土器1:4、土器拓影1:3に統一してあるが、その他のものについては適宜縮尺を明示してある。

・土器実測図のうち弥生時代の赤彩品は、古墳時代以降の黒色処理は、また須恵器は断面を黒塗りて表現してある。

・出土土器観察表の記述は下記の要領で行なった。

番号：図版番号と一致する。

分量：実際の計測値ならびに推定復元による計測値を記した。

遺存度：図示した部分の遺存度を記した。

色調：灰白色(A)・淡黄褐色(B)・暗黄褐色(C)・暗褐色(D)・黒褐色(E)とし、中間的なものはAB・BCなどと表示した。

# 目 次

序	
例言	
第1章 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の体制	2
第2章 調査地周辺の考古学的環境	5
第3章 調査	10
1 調査概要	10
二ツ宮 (FM) 遺跡	10
本堀 (MB) 遺跡	13
柳田 (YD) 遺跡	13
稲添 (IZ) 遺跡	14
2 遺構・遺物	45
1 弥生時代中期後半	45
MB7号住居址・MB6号住居址・FM5区16号住居址・FM5区4号住居址・MB16号溝址 MB15号溝址	
2 弥生時代後期	76
FM5区12号住居址・FM5区15号住居址	
3 古墳時代前期	82
YD3区5号住居址・IZ24号土壇・FM2区2号土壇・FM4区20号溝址	
4 古墳時代中期	93
FM5区13号住居址・FM5区5号住居址・FM2区23号住居址・MB2号住居址・MB3号住居址・ FM1区1号住居址・FM1区9号住居址・FM2区11号住居址	
5 古墳時代後期	115
MB7号溝址・MB6号土壇・FM3区2号住居址・FM1区35号住居址	
6 奈良時代	124
FM1区27号住居址・FM1区37号住居址・FM2区3号住居址・FM3区1号住居址・FM1区58号 住居址・FM4区9号住居址・FM1区7号住居址・FM1区43号住居址・FM1区52号住居址・FM 3区21号住居址・FM1区13号土壇	
7 平安時代	131
FM1区36号住居址・FM1区66号住居址・FM1区13号住居址・FM1区31号住居址・FM1区47号 住居址・FM1区50号住居址・FM1区64号住居址・FM1区61号住居址・FM2区25号住居址・FM 1区32号住居址・FM1区45号住居址・FM1区34号住居址・FM1区42号住居址・FM1区60号住居 址・FM2区5号住居址・FM1区25号住居址・YD2区1号住居址・YD2区33号土壇・FM5区1	

号住居址・FM5区2号土壌	
8その他	148
IZ12号土壌・FM4区17号土壌・FM2区13号溝址・IZ10号溝址	
第4章 考察	173
1 ニツ宮遺跡1区9号住居址出土の須恵器について	173
2 稲添遺跡出土の瓦塔について	174
3 若槻地域における古代仏教文化の一考察	181
4 中近世遺物	184
第5章 結語	186

## 挿図目次

図1 調査地ならびに調査地周辺の地形	図24 YD(柳田)3区調査地点全測図
図2 調査地周辺遺跡分布図	図25 稲添(IZ)遺跡調査区全測図
図3 周辺字境図	図26 稲添(IZ)遺跡調査地点全測図①
図4 区画整理事業計画図	図27 稲添(IZ)遺跡調査地点全測図②
図5 調査地位置図	図28 MB7号住居址実測図
図6 遺跡範囲推定図	図29 MB7号住居址土器出土状況実測図
図7 FM(ニツ宮)1区調査地点全測図	図30 MB7号住居址出土土器実測図①
図8 FM(ニツ宮)2区調査地点全測図	図31 MB7号住居址出土土器実測図②
図9 FM(ニツ宮)3区調査地点全測図①	図32 MB7号住居址出土土器拓影
図10 FM(ニツ宮)3区調査地点全測図②	図33 MB6号住居址実測図
図11 FM(ニツ宮)4区調査地点全測図①	図34 MB6号住居址出土土器拓影
図12 FM(ニツ宮)4区調査地点全測図②	図35 MB6号住居址出土土器実測図
図13 FM(ニツ宮)4区調査地点全測図③	図36 FM5区16号住居址実測図
図14 FM(ニツ宮)5区調査地点全測図	図37 FM5区16号住居址土器出土状況実測図
図15 FM(ニツ宮)6区調査地点全測図	図38 FM5区16号住居址出土土器拓影①
図16 FM(ニツ宮)7区調査地点全測図	図39 FM5区16号住居址出土土器実測図
図17 本場(MB)遺跡調査区全測図	図40 FM5区16号住居址出土土器拓影②
図18 本場(MB)遺跡調査地点全測図①	図41 FM5区4号住居址実測図
図19 本場(MB)遺跡調査地点全測図②	図42 FM5区4号住居址出土土器実測図
図20 柳田(YD)遺跡調査区全測図	図43 MB16号溝址土器出土状況実測図
図21 YD(柳田)1区調査地点全測図①	図44 MB16号溝址出土土器実測図①
図22 YD(柳田)1区調査地点全測図②	図45 MB16号溝址出土土器実測図②
図23-① YD(柳田)2区調査地点全測図①	図46 MB16号溝址出土土器実測図③
図23-② YD(柳田)2区調査地点全測図②	図47 MB16号溝址出土土器実測図④
	図48 MB16号溝址出土土器拓影①
	図49 MB16号溝址出土土器拓影②
	図50 MB15号溝址土器出土状況実測図

- 図51 MB15号溝址出土土器実測図  
図52 MB15号溝址出土土器拓影①  
図53 MB15号溝址出土土器拓影②  
図54 MB15号溝址出土土器拓影③  
図55 MB15号溝址出土土器拓影④  
図56 FM 5区12号住居址実測図  
図57 FM 5区12号住居址出土土器拓影①  
図58 FM 5区12号住居址出土土器実測図  
図59 FM 5区12号住居址出土土器拓影②  
図60 FM 5区15号住居址実測図  
図61 FM 5区15号住居址出土土器実測図  
図62 YD 3区5号住居址実測図  
図63 YD 3区5号住居址土器出土状況実測図  
図64 YD 3区5号住居址出土土器実測図①  
図65 YD 3区5号住居址出土土器実測図②  
図66 IZ24号土壙土器出土状況実測図  
図67 IZ24号土壙出土土器実測図  
図68 FM 2区2号土壙出土土器実測図  
図69 FM 4区20号溝址出土土器実測図  
図70 FM 5区13号住居址土器出土状況実測図  
図71 FM 5区13号住居址実測図  
図72 FM 5区13号住居址出土土器実測図①  
図73 FM 5区13号住居址出土土器実測図②  
図74 FM 5区13号住居址出土土器実測図③  
図75 FM 5区5号住居址実測図  
図76 FM 5区5号住居址出土土器実測図  
図77 FM 2区23号住居址実測図  
図78 FM 2区23号住居址出土土器実測図  
図79 MB 2号住居址実測図  
図80 MB 2号住居址出土土器実測図  
図81 MB 3号住居址出土土器実測図  
図82 FM 1区1号住居址実測図  
図83 FM 1区1号住居址出土土器実測図①  
図84 FM 1区1号住居址出土土器実測図②  
図85 FM 1区9号住居址実測図  
図86 FM 1区9号住居址出土土器実測図①  
図87 FM 1区9号住居址出土土器実測図②  
図88 FM 2区11号住居址出土土器実測図  
図89 MB 7号溝址出土土器実測図  
図90 MB 6号土壙実測図  
図91 MB 6号土壙出土土器実測図  
図92 FM 3区2号住居址実測図  
図93 FM 3区2号住居址カマド付近実測図  
図94 FM 3区2号住居址出土土器実測図  
図95 FM 1区35号住居址実測図  
図96 FM 1区35号住居址カマド実測図  
図97 FM 1区35号住居址出土土器実測図  
図98 FM 1区27号住居址実測図  
図99 FM 1区27号住居址出土土器実測図  
図100 FM 1区37号住居址実測図  
図101 FM 1区37号住居址出土土器実測図  
図102 FM 2区3号住居址実測図  
図103 FM 2区3号住居址出土土器実測図  
図104 FM 3区1号住居址実測図  
図105 FM 3区1号住居址出土土器実測図  
図106 FM 1区58号住居址実測図  
図107 FM 1区58号住居址出土土器実測図  
図108 FM 4区9号住居址出土土器実測図  
図109 FM 1区7号住居址実測図  
図110 FM 1区7号住居址出土土器実測図  
図111 FM 1区43号住居址出土土器実測図  
図112 FM 1区43号住居址実測図  
図113 FM 1区52号住居址出土土器実測図  
図114 FM 3区21号住居址出土土器実測図  
図115 FM 1区13号土壙出土土器実測図  
図116 FM 1区36号住居址実測図  
図117 FM 1区36号住居址カマド実測図  
図118 FM 1区36号住居址出土土器実測図  
図119 FM 1区66号住居址実測図  
図120 FM 1区66号住居址出土土器実測図  
図121 FM 1区13号住居址出土土器実測図  
図122 FM 1区31号住居址出土土器実測図  
図123 FM 1区31号住居址実測図  
図124 FM 1区47号住居址実測図  
図125 FM 1区47号住居址出土土器実測図  
図126 FM 1区47号住居址カマド実測図

図127	FM 1 区50号住居址実測図
図128	FM 1 区50号住居址出土土器実測図①
図129	FM 1 区50号住居址出土土器実測図②
図130	FM 1 区64号住居址実測図
図131	FM 1 区64号住居址出土土器実測図
図132	FM 1 区61号住居址実測図
図133	FM 1 区61号住居址カマド実測図
図134	FM 1 区61号住居址出土土器実測図①
図135	FM 1 区61号住居址出土土器実測図②
図136	FM 2 区25号住居址実測図
図137	FM 2 区25号住居址出土土器実測図
図138	FM 1 区32号住居址出土土器実測図
図139	FM 1 区45号住居址実測図
図140	FM 1 区45号住居址出土土器実測図
図141	FM 1 区34号住居址実測図
図142	FM 1 区34号住居址出土土器実測図①
図143	FM 1 区34号住居址出土土器実測図②
図144	FM 1 区42号住居址実測図および 出土土器実測図
図145	FM 1 区60号住居址出土土器実測図
図146	FM 2 区 5号住居址出土遺物実測図
図147	FM 1 区25号住居址実測図
図148	FM 1 区25号住居址出土土器実測図
図149	YD 2 区 1号住居址出土土器実測図
図150	YD 2 区33号土壇址出土土器実測図
図151	FM 5 区 1号住居址出土土壇実測図
図152	FM 5 区 2号土壇出土土壇実測図
図153	IZ12号土壇実測図
図154	FM 4 区17号土壇実測図
図155	FM 2 区13号溝址出土遺物実測図
図156	石器・金属器類実測図①
図157	石器・金属器類実測図②
図158	出土瓦拓影
図159	稲添遺跡出土瓦塔実測図①
図160	稲添遺跡出土瓦塔実測図②
図161	稲添遺跡出土瓦塔実測図③
図162	中・近世遺物実測図①
図163	中・近世遺物実測図②

## 表 目 次

表 1	出土土器観察表 1
表 2	出土土器観察表 2
表 3	出土土器観察表 3
表 4	出土土器観察表 4
表 5	出土土器観察表 5
表 6	出土土器観察表 6
表 7	出土土器観察表 7
表 8	出土土器観察表 8
表 9	出土土器観察表 9
表10	出土土器観察表10
表11	出土土器観察表11
表12	出土土器観察表12
表13	出土土器観察表13
表14	出土土器観察表14
表15	出土土器観察表15
表16	出土土器観察表16
表17	出土土器観察表17
表18	出土土器観察表18
表19	出土土器観察表19
表20	出土土器観察表20
表21	界内の瓦塔出土遺跡
表22	中・近世遺物一覧表

## 付 図 目 次

付図 1	二ツ宮遺跡調査区全測図
付図 2	二ツ宮遺跡時期別遺構分布図①
付図 3	二ツ宮遺跡時期別遺構分布図②

# 第1章 調査経過

## 1 調査に至る経過

長野市稲田・徳間地籍は、地理的には浅川によって形成された浅川扇状地上に位置し、現在の地目は、北西から南東へ傾斜する地形の大部分が、畑地や果樹園として利用され、もっとも低位置となるJR信越線付近に水田が展開する。

昭和61年、この地域において市街地の造成を目的とした、事業面積約45haにも及ぶ長野市稲田徳間土地区画整理事業が計画された。事業予定地は周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置するため、長野市教育委員会は同都市開発部区画整理課の委託を受け、事前に埋蔵文化財の存在の有無を確認するために、確認調査を実施することになった。

確認調査は長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する調査団によって、昭和61年10月23日～10月29日の7日間にわたって実施された。調査は現地調査による遺物の散布状況より、事業予定地内に大きく5ヶ所の埋蔵文化財包蔵地の存在を確認し、さらに遺物散布の集中範囲を中心として、計14ヶ所で試掘調査を実施した。広大な面積中の任意の地点にすぎないため、土層堆積状況は各地点において不均一ではあったが、共通して遺物を包含した黒色土層と、同層直下の凝灰岩小礫をまじえた自然層とが確認され、浅川扇状地上に存在する他遺跡での調査所見からも、事業予定地内には埋蔵文化財の存在する可能性がきわめて高いことが確認された。

この結果により区画整理事業の着手に際して、掘削等の工程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い道路部分約37,500㎡について、記録保存を前提とした発掘調査の必要性が確認されるに至った。

本調査は昭和63年から開始され、工事工程・他遺跡調査日程との調整から、以下の3次にわたって実施した。

- 1次調査 昭和63年10月26日～12月26日 平成元年3月4日～3月30日
- 2次調査 平成元年4月3日～12月21日
- 3次調査 平成2年4月17日～8月31日 10月23日～11月9日



調査地近景



## 2 調査の体制

### (1) 昭和61年度の調査

試掘調査は長野市の委託を受け、長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する調査団によって実施された。

長野市遺跡調査会の組織 (昭和61年度)

会 長	奥村秀雄 (教育長)
委 員	米山一政 (長野市文化財保護審議会会長)
	桐原 健 (長野市文化財保護審議会委員)
	清水富一 (教育次長)
	関川千代丸 (社会教育課文化財専門主事)
	矢口忠良 (調査団長)
監 事	高野 覚 (教育委員会総務課長)
事務局長	吉見 敏 (社会教育課長)
局 員	吉池弘忠 (社会教育課主幹)
	山崎博三 (社会教育課主査)

#### 調査団

調査団長	矢口忠良 (長野市立博物館主査)
調査員	山口 明 (長野市立博物館主事)
	青木和明 (長野市立博物館主事)
	中殿章子 (長野県考古学会員)
	横山かよ子 (長野県考古学会員)
	出河裕典 (信州大学学生)
参加者	川島邦子 藤沢月子 丸山たまき
	丸山悦子 白井充子

### (2) 昭和63年度の調査

前年度の調査から長野市教育委員会が直接事業を実施することになった。組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄
総括責任者	市埋蔵文化財センター所長	諏訪部和彦
庶務係	"	所長補佐 小山 正
	"	職員 青木厚子
調査係	"	調査係長 矢口忠良
	"	主事 青木和明

市埋蔵文化財センター主事 千野 浩

"	専門員	中殿章子
"	専門員	横山かよ子
"	専門主事	小松安和
"	専門主事	中沢克己
"	専門主事	大室 昂

調査員 清水隆寿 (立正大学学生)

参加者	金子麻子 金子ゆき 小林志げる 佐藤君江 佐藤幸子 佐藤はま 佐藤秀子 佐藤 幸 長原邦子 中山やす子 成田敦子 成田とよみ 成田千里 成田りん 横山初子 横山ふと江 吉沢美智代 荒井久子 成田幸子 新津三千子 新津照子 田中重二郎 原田やよい 美谷島昇 神頭幸雄 柄沢清志 川島邦子 丸山悦子 柄沢好文 西沢延子 吉沢トシ子 小林キミ子 川島 浩 林 貞子 吉沢秋子 新津美幸 宮沢芳美 原 汪子 横山温子 丸山律子 塩瀬米子 宮沢けさよ 小林敏江 宮下栄子 新津茂代 竹腰千代子 金子雪枝 金子とく 中条くら子 藤沢寛美 金子文江 玉井和子 横山百代 金子房吉 横山春男 橋爪孝次 宮沢あや野 小林さと 林 静香 藤沢あき子 藤沢隆江 倉石弥生 中山幸子
-----	---

### (3) 平成元年度の調査

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄
総括責任者	市埋蔵文化財センター所長	水沢国男
庶務係	"	主幹 小山 正
	"	職員 青木厚子
調査係	"	調査係長 矢口忠良
	"	主事 青木和明
	"	主事 千野 浩
	"	専門員 中殿章子
	"	専門員 横山かよ子
	"	専門主事 小松安和
	"	専門主事 中沢克己
	"	専門主事 大室 昂
	"	職員 今井悦子
参加者	金子麻子 金子ゆき 小林志げる 佐藤君江 佐藤幸子 佐藤はま 佐藤秀子 佐藤 幸 長	

原邦子 中山やす子 成田敦子 成田とよみ 成田千里 成田りん 横山初子 横山ふち江 吉沢美智代 荒井久子 成田幸子 新津三千子 新津照子 田中重二郎 原田やよい 美谷島昇 神頭幸雄 柄沢清志 川島邦子 丸山悦子 柄沢好文 西沢延子 吉沢トシ子 小林キミ子 林 貞子 吉沢秋子 新津美幸 宮沢芳美 原 汪子 横山温子 丸山律子 塩瀬米子 宮沢けさよ 小林敏江 宮下栄子 新津茂代 竹腰千代子 金子雪枝 金子とく 中条くら子 横山百代 金子房吉 横山春男 橋爪孝次 小林さと 宮沢茂人 岡角吉之丞 原 光雄 長原亀雄 竹本もと 藤沢菊江 小林綾子 山口悦子 中沢慶子 吉沢伸一

#### (4) 平成2年度の調査

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村秀雄  
 総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 水沢国男  
 庶務係 " 主幹 小山 正  
 " 職員 青木厚子  
 調査係 " 調査係長 矢口忠良  
 " 主事 青木和明  
 " 主事 千野 浩  
 " 専門員 中殿章子  
 " 専門員 横山かよ子  
 " 専門主事 小松安和  
 " 専門主事 中沢克己  
 " 専門主事 大室 昂  
 " 職員 今井悦子

参加者 金子麻子 金子ゆき 小林志げる 佐藤君江 佐藤幸子 佐藤はま 佐藤秀子 佐藤 幸 長原邦子 中山やす子 成田敦子 成田とよみ 成田千里 成田りん 横山初子 横山ふち江 吉沢美智代 荒井久子 成田幸子 新津三千子 田中重二郎 原田やよい 美谷島昇 神頭幸雄 柄沢清志 川島邦子 新津照子 小林敏江 吉沢トシ子 小林キミ子 林 貞子 吉沢秋子 新津美幸 宮沢芳美 原 汪子 横山温子 丸山律子 宮沢けさよ 福沢淳作 新津茂代

竹腰千代子 金子雪枝 金子とく 中条くら子 横山百代 金子房吉 小林さと 岡角吉之丞 原 光雄 長原亀雄 竹本もと 藤沢菊江 山口悦子 吉沢伸一

#### 整理作業参加者 (昭和63年～平成2年)

岡沢治子 徳成奈於子 高木美香 徳成里子 岡沢洋子 池田見紀 小泉ひろ美 西尾千枝 向山純子

#### (5) 平成3年度の調査 (整理作業)

調査主体者 長野市教育委員会教育長 奥村秀雄  
 総括責任者 市埋蔵文化財センター所長 小山 正  
 庶務係 " 所長補佐 山中武徳  
 " 職員 青木厚子  
 調査係 " 調査係長 矢口忠良  
 " 主事 青木和明  
 " 主事 千野 浩  
 " 主事 飯島哲也  
 " 専門員 中殿章子  
 " 専門員 横山かよ子  
 " 専門員 森泉かよ子  
 " 専門主事 太田重成  
 " 専門主事 小松安和  
 " 専門主事 羽場卓雄  
 調査員 青木善子 寺島孝典  
 参加者 岡沢治子 徳成奈於子 池田見紀 小泉ひろ美 西尾千枝 向山純子 笠井敦子

#### 執筆参加者

出河裕典 (長野県埋蔵文化財センター)

原田和彦 (長野市立博物館)

事業主体者である長野市稲田徳間上地区画整理組合におかれては、埋蔵文化財保護に対して深いご理解を頂き絶大なご協力を賜った。厚くお礼申し上げます。



図1 調査地ならびに調査地周辺の地形 (1 : 10,000)

## 第2章 調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を侵食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均勾度1/45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地上には多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。今回の調査地点も浅川扇状地扇尖付近に位置し同遺跡群の周知の範囲内に位置する。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが扇状地上にはその存在は確認されていない。

続く縄文時代には、湯谷・赤笠平・刈田・牟礼バイパスA地点・徳間榎木田・浅川端の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と、浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスA地点遺跡、後者に浅川端遺跡がある。牟礼バイパスA地点遺跡では前期前葉の住居址1軒、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址1軒、土壌1基が検出されている。

浅川扇状地の本格的な開発は次ぎの弥生時代から始まったものといえる。主要な遺跡には徳間小学校遺跡・牟礼バイパスD地点遺跡・神楽橋遺跡・浅川端遺跡・吉田高校グラウンド遺跡等がある。徳間小学校遺跡では中期終末の住居址2軒が検出されているが、近年周辺が土地区画整理事業に伴って調査され、同時期の集落が数箇所検出されている。牟礼バイパスD地点遺跡では中期葉林式器の住居址4軒・土壌1基、浅川端遺跡では同時期の住居址2軒・土器集積1が検出されているがともに従来不明瞭であった葉林式前葉のもので、良好な資料といえよう。吉田高校グラウンド遺跡は後期初頭吉田式土器の標識遺跡で、特に第3次調査では住居址10軒からなる当該期の単一集落が良好な状態で検出されている。浅川扇状地上にて検出された上記の諸遺跡はいずれも中期～後期初頭に限られ、後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄であり、少なくとも現状では中期～後期初頭の大規模集落と箱清水式期の大規模集落とが分布上一致することはない。この状況が善光寺平の他の地域にもそのままあてはまるか否かは不明であるが、その背後には生産もしくは生活様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性もあり今後の重要な検討課題である。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスB地点遺跡・下宇木遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。さらにこれらの諸遺跡では陶器編年1型式2段階～4段階に対応すると考えられる古手の須恵器が比較的集中して出土する傾向が顕著であり、この点も善光寺平の中では特徴的である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の保有した多量の須恵器の存在を合わせ考えると、当該期における浅川扇状地の重要性がにわかにクローズアップされてこよう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスB・C・D地点、三輪遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に存在するのではなく、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

また平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢などはその名残と考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと考えられる。

中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城をはじめ本郷・押鐘・相ノ木・平林・和田などの城館址が存在する。

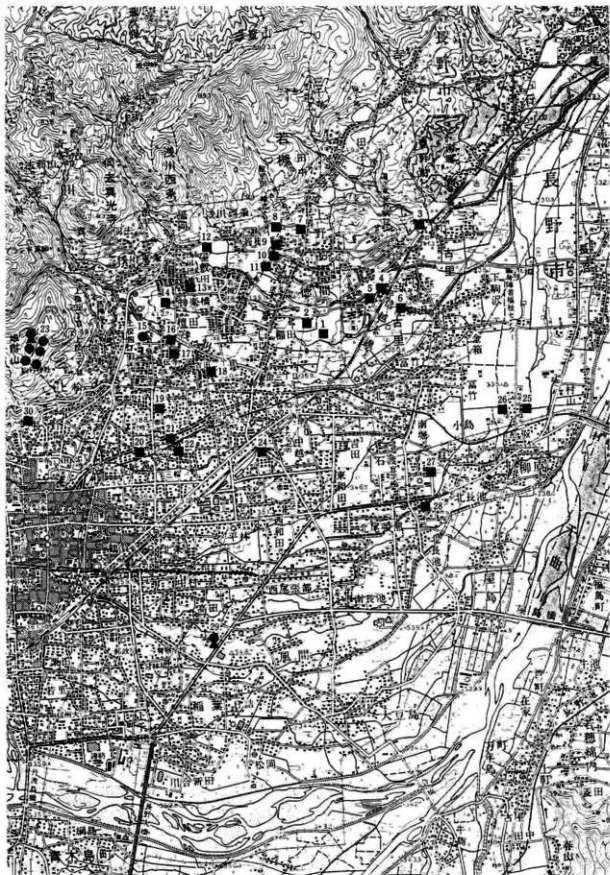


図2 調査地周辺道跡分布図(1:25,000)

1. 調査地 2. 徳間柳田遺跡 3. 三才田子遺跡 4. 駒沢祭祀遺跡 5. 駒沢新町遺跡
6. 上駒沢遺跡 7-11. 車礼バイパスA-E地点遺跡 12. 浅川西条遺跡 13. 神楽橋遺跡 14. 榎田遺跡
15. 湯谷古墳群 16. 浅川端遺跡 17. 押鎌遺跡 18. 吉田高校グラウンド遺跡 19. 下字本遺跡 20-22. 三輪遺跡
23. 地附山古墳群 24. 国鉄貨物基地遺跡 25. 中俣遺跡 26. 水内坐一元神社遺跡 27. 小島境遺跡
28. 南川向遺跡 29. 南向塚古墳 30. 稻清水遺跡



図3 尾辺半地域

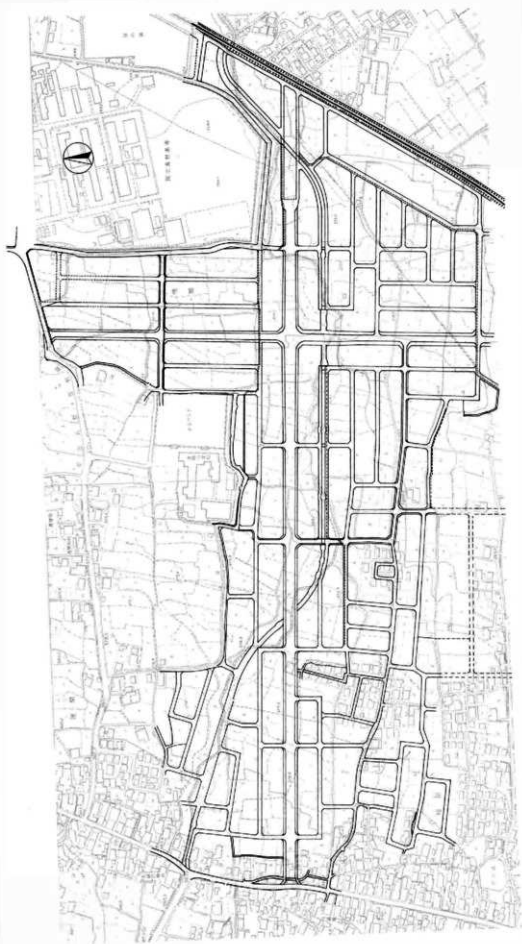


图4 区画整理事業計画図 (1/6,000)

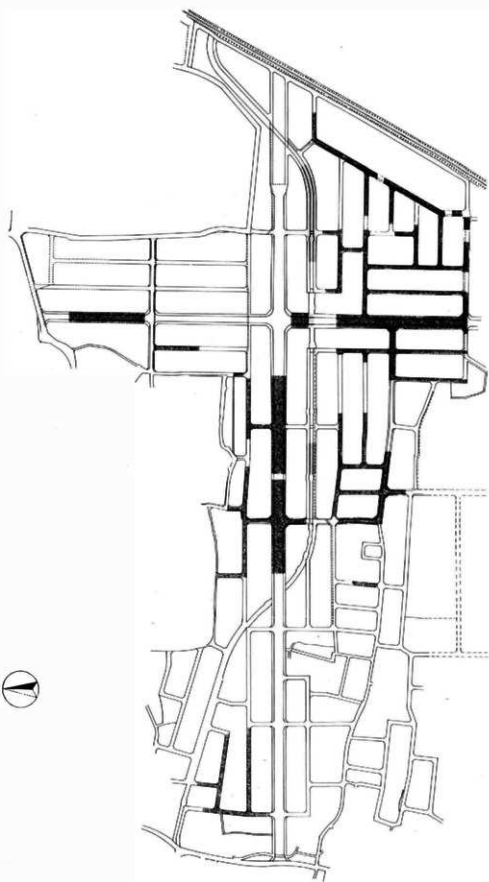


图5 调查地位图



## 第3章 調査

### 1 調査概要

#### 二ツ宮 (FM) 遺跡

今回の調査地の中では、もっとも規模の大きな遺跡として把握されるもので、大きく二ツ宮・北原・稗田・弘誓・臼田地籍に展開することが予想される。その中心は二ツ宮地籍と考えられ、その字名をとって二ツ宮遺跡と呼称する。

調査面積が広大なこともあり、便宜的に1～7区に分離した(付図1)。このうち新田川改修事業地点(第2分冊)は昭和63年度に、1区・7区は平成元年度に、2～6区は平成2年度に発掘調査を実施した。

地形は北西から南東方向への緩傾斜となっており、JR信越線に平行する5区や、本調査区南端に位置する6区はもっとも低位置となり、これらの調査区以東ならびに以南には現状では水田域が展開する。また7区以北は、新田川を挟んで若干の低地帯が存在し、柳田遺跡とは明瞭に画されている。

調査は全体で、住居址133軒、溝址52本、土塙・柱穴多数を検出している。以下時代を追ってその概要を述べたい。

#### 弥生時代

弥生時代中期後半の粟林式期から、後期中葉の箱清水式前半期のもまでが検出されている。遺構の分布は本遺跡北東端に限定され、3区東端・5区北東端ならびに新田川改修事業地点に展開する(なお新田川改修事業地点についての詳細は第2分冊を参照されたい)。

弥生時代中期後半の粟林式期も若干の時間幅を持っており本遺跡では中段階と、新段階のものが検出されている。中心となるのは新段階のもので、新田川改修事業地点や、5区4号・16号住居址などが該当する。新田川改修事業地点を北西端とする当該期集落の展開が予想されるが検出住居も少なく、詳細は今後の調査に期待したい。

一方中段階と考えられるものには、3区下層東端で検出された15号・16号住居址がある。出土土器が少なく明確な時期比定は困難であるが、円形プランの15号住居址が、長方形プランの16号住居址を切って構築されている。従来不明瞭であった、北信地方における中期段階での方形プラン住居の問題を考察するうえで、良好な資料となろう。

本遺跡で検出された弥生期の遺構の中でも中心をなすのは、後前半に比定されるものである。遺構の分布は新田川改修事業地点を北西端として、5区までおよぶ。特に新田川改修事業地点では、集落構造の一部を垣間見せるような状況で住居址群が検出されており、その集落は遺構の分布状況から、新田川改修事業地点から南へ120m、東へ250mほどの範囲が想定しうる。

時間的には吉田式と箱清水式との過渡期的な様相を示す時期で、後期を5区に区分した場合の第2段階に当たり、長野吉田高校で検出された第1段階の集落に後続する時期の良好な集落址と考えられる。

しかし、後続する第3段階では早くもこの集落は衰退の兆しを見せ、5区にて14号・15号の2軒の住居址が検出されたにすぎない。

中期後半粟林式中段階に成立した二ツ宮遺跡の弥生時代集落は、そのまま中期終末まで存在し、その後一次断絶した後に、新たに後期第2段階で比較的大規模な集落が形成されるものの、その存続期間は短く、次ぎの第3段階では早くも衰退し始めるといった動向がうかがえよう。

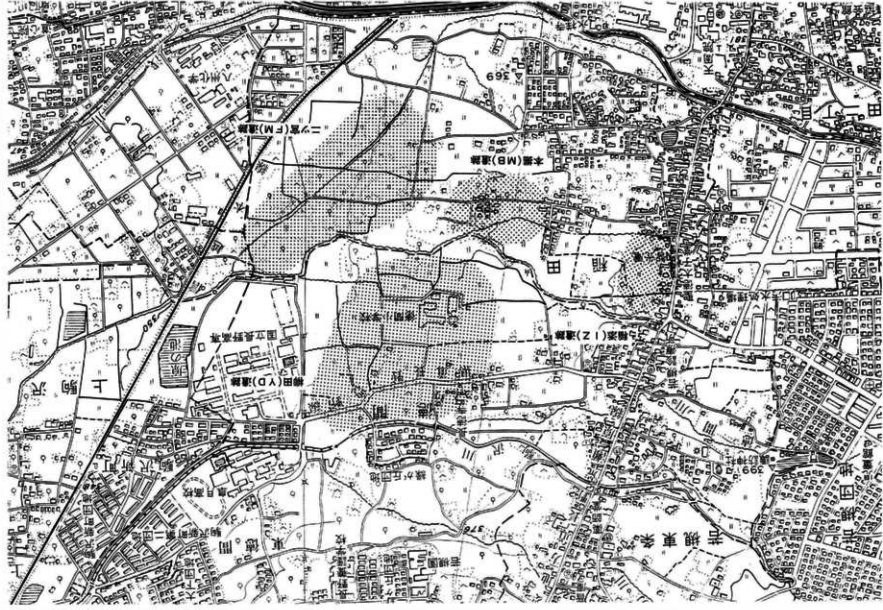


図6 通線範囲指定図

## 古墳時代

古墳時代前期から後期にわたる遺構が検出されている。前期にさかのぼるものでは、住居址は検出されておらず、2区2号土壇ならびに4区20号溝址が検出されているのみである。また6区では遺構は検出されていないが、当該期の土器が比較的確認されている。4区20号溝址出土土器の中には東海地方と北陸地方の影響を共に有する資料が存在し、本遺跡の地理的位置と共に当該期の文化交流のあり方一端を考えさせるものとして興味深い資料である。総体に弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての遺構分布は、二ツ宮遺跡においては希薄である。

古墳時代において本格的な集落が展開するのは、次ぎの中期に入ってからである(付図2)。中期には1・2区南半から6区にかけての範囲(集落A)ならびに、5区北東部分(集落B)の大きく2箇所に集落が形成される。

集落Bは5号ならびに13号住居址の2軒しか検出されておらずその詳細は不明といわざるをえないが、共にカマド出現以前の住居址である。特に13号住居址は中期前半の良好な一括資料を出土しており注目される。

集落Aは1・2区南半から6区にかけての南北約250m、東西約300mの範囲に展開するが時間的には幅をもつ。しかし主体となるのは集落B同様にカマド出現以前でその中心は6区に存在する。6区ではほぼ同一時期と考えられる住居が8軒検出されている。

集落Aはその後、未だカマドは出現していないが出土土器に須恵器の影響のうかがわれる1区1号住居址さらに陶器編年1型式4段階に併行すると考えられる須恵器を出土した1区9号住居址といった具合に継続するが、その規模は漸次縮小するようである。

後期の遺構には1区19号・35号住居址、3区2号住居址などがあり、これらは時間的に後期前半の19号住居址と、終末に近い35号・2号住居址に分離できる。集落構造等詳細は不明であるが、位置的に離れた地点にある3区2号住居の存在や、1区北半の奈良・平安朝の遺構の密集度から、1～3区西側にかけて比較的広範囲に住居群が展開していた可能性も考えられる。

## 奈良・平安時代

奈良時代以降集落の中心は、本遺跡の中心部といえる1区北半から3区に展開するようになる(付図3)。

奈良時代の住居址は確実なもので1軒検出しているが、いずれも平安期の遺構に切られたり、出土遺物が断片的でその詳細は不明といわざるをえない。ただし、遺構の分布を見るに、平安期よりもその分布の密集度は希薄であるものの、1～5区の広範囲に住居群が展開し、古墳時代中期集落の衰退以後、新たに本格的な開発が開始された時期として評価することができよう。また4区東半にみる東西もしくは南北方向に直線的に伸びる溝址も、その傍証と考えられようか。

特殊な遺物として2区13号溝址より、瓦製鴟尾の破片が出土している。共存する遺物から確実には奈良期のものと限定できぬものの、第5章にて述べられているとおり、寺院に関連する施設の存在が想定されるならば、究めて興味深いものとなろう。

平安時代も奈良時代同様、1区北半から3区に集落の中心が展開するが、2区に見るようにその範囲は調査区西側にも広がるようである。確実なもので住居址41軒を検出しているが、時間的には平安時代前期～末期のものまでを含んでいる。しかし、住居の密集度はすべてが同一時期のものではないにしろ、前時代のそれとは比べものにならないほどの様相を呈している。

また特に注目しておきたいのは、厳密には同時期と限定しかねるものの、1・3区にて検出された方形状にめぐる溝址群である。その北西に展開する住居址群と一線を画して、この溝によって区画された遺構分布の希薄な

地帯が存在している。その大部分は調査区外となり詳細は不明であるが、一般住居とは別の特別な空間として把握される可能性もあり、今後の調査に期待したい。

特殊な遺物として、2区5号住居址覆土より八稜鏡破片が出土している。

なお本遺跡3・4区には稲積の一里塚が存在し、旧北国街道の通過地点であったことが知られている。またさらにそれを古東山道との関連で理解しようとする研究も存在する。今回の調査に当たってはそれを十分意識し、3・4区の該当部分においてかなり綿密なトレンチ調査を実施しているが、道路に関連する遺構は確認されていない。

#### 本堀 (MB) 遺跡

字本堀地籍に存在し、二ツ宮遺跡の西側に存在する。二ツ宮遺跡との区分は必ずしも明確ではないが、両者の遺構分布には連続性は認められずまたそれぞれ中心となる時期も異なるため、一応独立した遺跡として理解し、詳細は今後の調査に期待したい。

調査区西隣には、本堀氏の居館址といわれる本堀城が存在し、字名の由来となっている。調査の実施以前に本堀城址周辺の微地形測量を実施したが、耕地ならびに宅地としての開発が進んでおり、地形上からは明確に館址等の存在を推定するには至っていない。

本遺跡で検出された遺構は、時代的には弥生時代中期、古墳時代中・後期、中世のものである。

弥生時代の遺構としては4号・6号・7号住居址ならびに15号・16号溝址が存在する。時代的にはいずれも中期栗林式中段階のものと考えられる。7号住居址・16号溝址からは良好な一括資料が出土しており注目される。

古墳時代の遺構として代表的なものには2号・3号住居址ならびに7号溝址がある。2号・3号住居址は共にカマド出現以前の住居址であり、また7号溝址は中期終末から後期前半の遺物を出土している。

弥生時代・古墳時代ともに検出された遺構は断片的なもので、集落構造等詳細は不明といわざるをえないが、当該期の集落の中心は本調査区南側に展開する可能性が高い。

このほかに、時期は不明であるが建物址が4棟検出されている。完掘できたものが少なく詳細は分からぬが、その主軸はほとんどが一致することから、それぞれ有機的な関連を有するものであった可能性が高い。

また3号・11号土塊、8号・17号溝址などから、青・白磁・珠洲系甕・カワラケ皿などが出土している。あるいは本堀城址との関連で理解すべきであるかもしれない。

#### 柳田 (YD) 遺跡

区画整理事業予定地中の新田川以北に存在する遺跡で、字大南・屋計・柳田・腰牧・三反田地籍に展開することが予想される。ただしこれらがすべて同一の遺跡として包括しうるか否かについては、今回の調査では明らかになし得ていない。時期別の遺構分布を勘案するに、1・2区は若干の弥生時代の遺構を含みつつもその中心は平安期が主体を成すのに対し、3区はむしろ弥生中期から古墳時代がその中心となってくる。かつて調査された柳田地籍に存在する徳間小学校遺跡の調査成果を考慮するならば、本遺跡は柳田～三反田地籍にかけて、大南・屋計～柳田地籍にかけての二つの遺跡に分割して理解しうる可能性もある点指摘しておく。

1・2区は前述のとおり、平安時代の遺構が遺跡の中心をなす。特に2区では一般の堅穴住居址が1軒検出されたのみであるのに対して、時期は厳密に確定できぬものの、建物址が少なくとも5棟確認されている。これらの建物址はその主軸や配置等から大きく2群に分割してとらえることができるが、堅穴住居址を中心とする二ツ宮遺跡の同時期集落とはおのずとその性格を異にしている点が理解し得よう。

また1・2区全体にわたって、北西から南東方向へ直線的に伸びる大規模な溝址が多数存在する。これらの溝址もその出土土器の様相から平安期に掘削されたものであり、それ以前はほとんど開発の手が加えられなかったこの地域に、平安期に至り新たに大規模な開発が進行した状況を示すものであろう。

3区は弥生中期から平安期にいたる遺構を検出しているが、主体となるのは弥生中期終末から古墳時代と考えられる。断片的な調査であり、その詳細は不明といわざるをえないが、徳間小学校遺跡の調査成果を考慮するならば、柳田地籍から本調査区西側の土井下・寺下地籍にかけての当該期の集落が展開する可能性が高い。

#### 稲添 (I2) 遺跡

区画整理事業予定地の中では最も西側に位置し、北国街道沿いに形成された現在の集落に接する位置にある。字稲添・太田地籍に存在するが、中心は稲添地籍と考えられ、その字名をとって稲添遺跡と呼称する。

全体に遺構の分布は希薄で、今回の調査では竪穴住居は確認されておらず、溝址・土壇・井戸址などが検出されている。時期的には古墳時代前期ならびに平安～中世のものが主体となる。

古墳時代前期の遺構は23・24号土壇のみで、共に築堀の井戸址と考えられる。特に24号土壇はその廃絶に伴って、多量の土器群が一括投棄された状況で出土しており、当時の井戸に関わる祭祀を考察するうえで興味深い。

平安期以降は溝や土壇が掘削されるのみで今回の調査では住居域は確認されていない。北国街道が現在の位置に移されるまでは、本調査区周辺は大規模な集落域として利用されなかった可能性が高い。

特殊な遺物として10号溝址より瓦塔破片が出土している。



二ツ宮遺跡近景

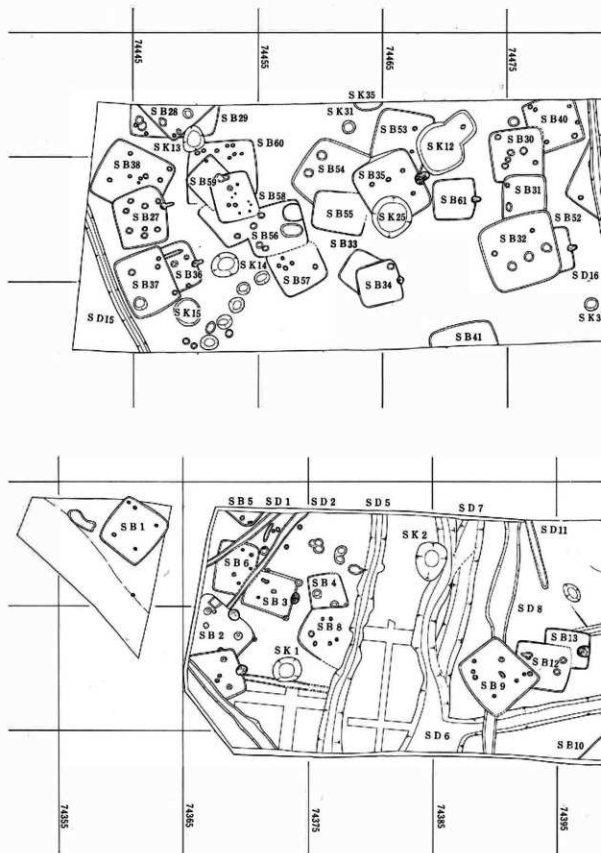


図7 FM(ニツ宮)1区調査地点全測図(1:300)

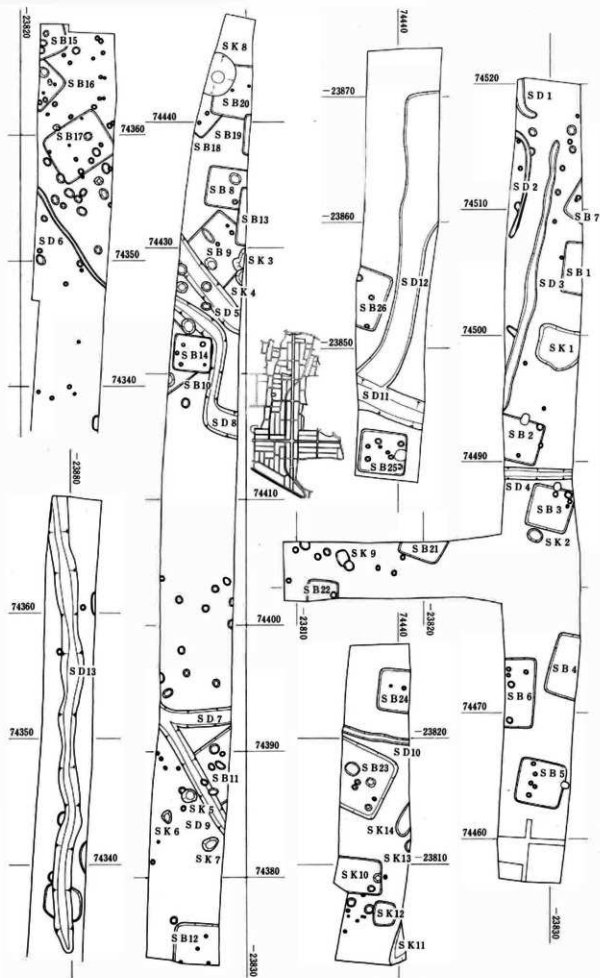


図8 FM(二ツ宮)2区調査地点全図(1:300)

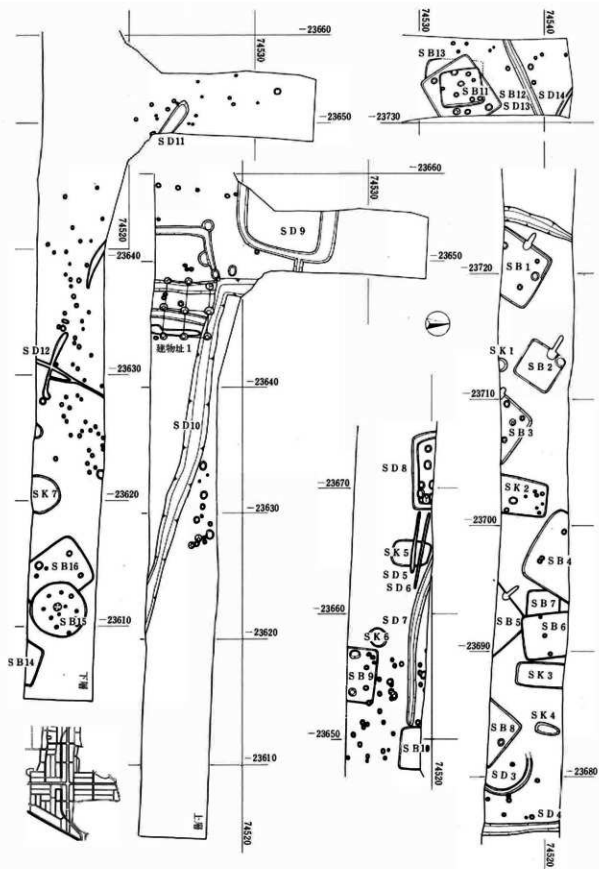


図9 FM(ニッ宮)3区調査地点全測図①(1:300)



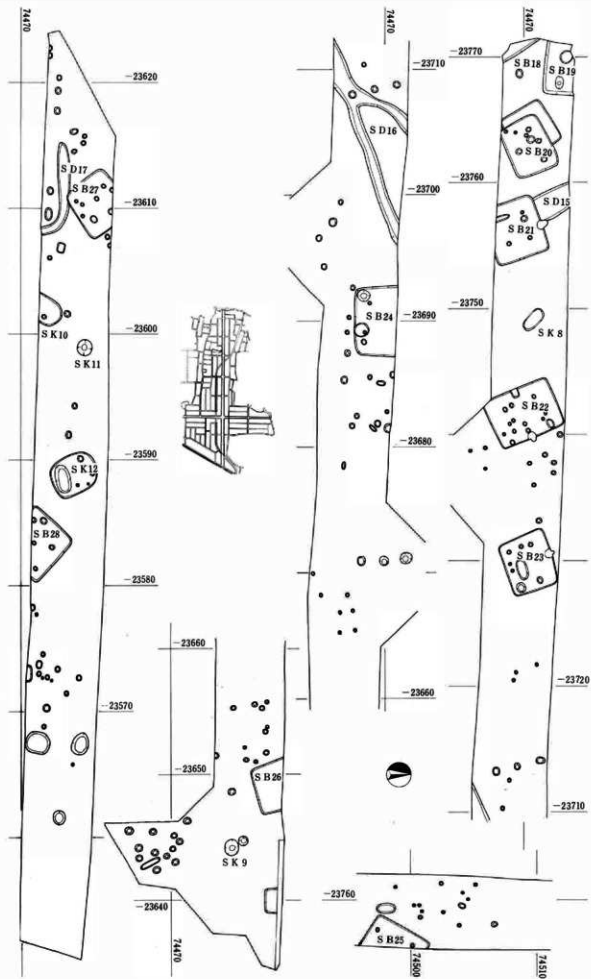


図10 FM (ニツ宮) 3区調査地点全測図② (1:300)

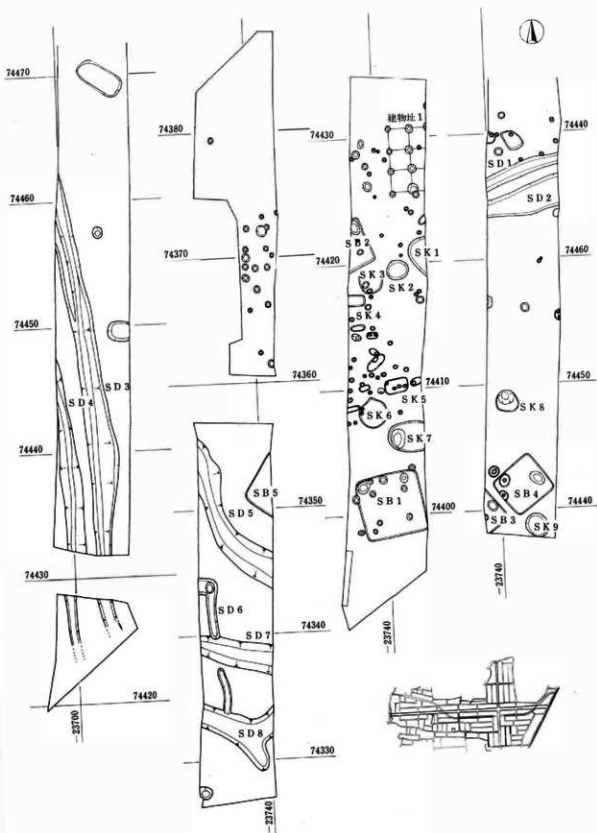


図11 FM(ニッ宮)4区調査地点全測図①(1:300)

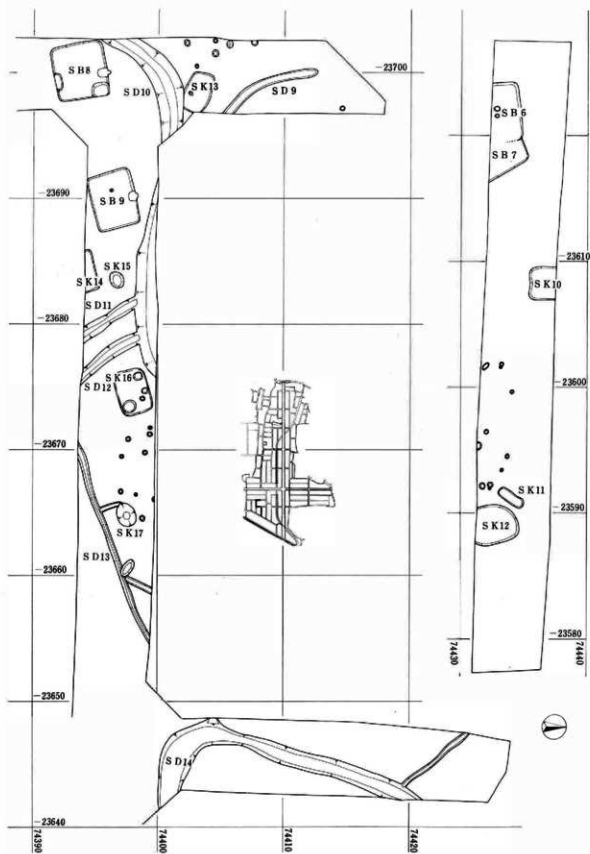


図12 FM (ニッ宮) 4区調査地点全測図② (1 : 300)

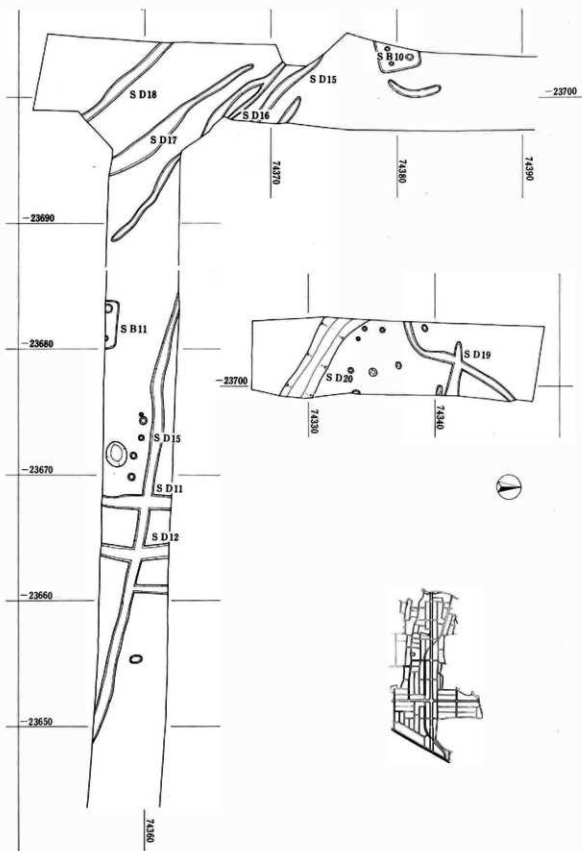


图13 FM(ニツ宮)4区調査地点全測図③(1:300)

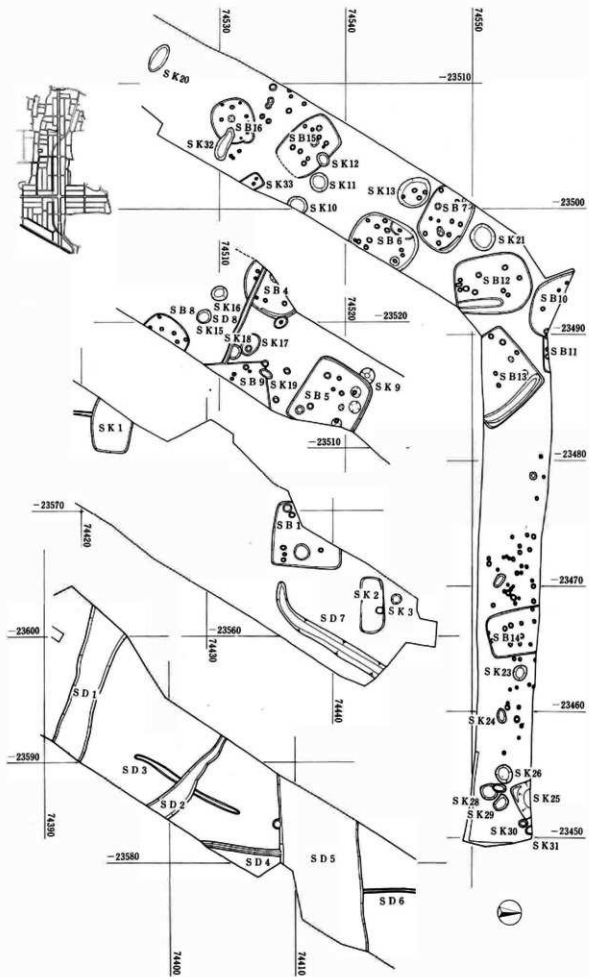


図14 FM (ニッ宮) 5区調査地点全測図 (1 : 300)



図15 FM (ニツ宮) 6区調査地点全測図 (1 : 200)



図16 FM (ニツ宮) 7区調査地点全測図 (1:200)

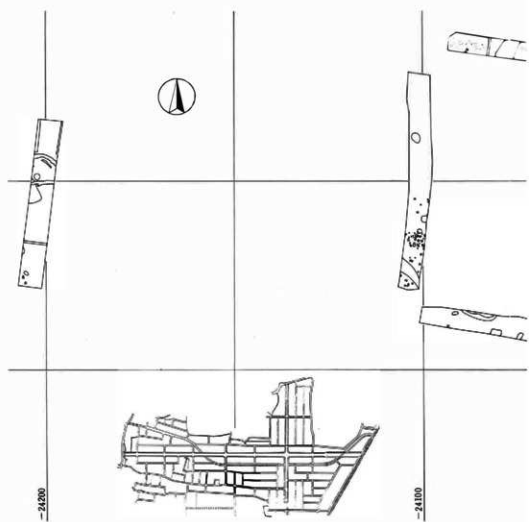


图17 本屋 (MB) 遺跡調査区全測図 (1:1,000)



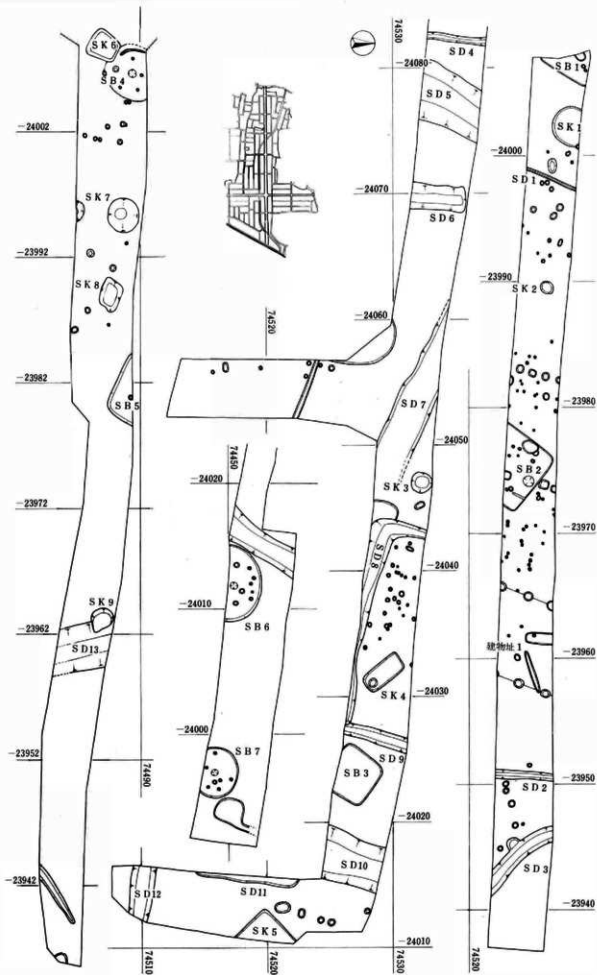


図18 本塚 (MB) 遺跡調査地点全測図① (1 : 300)

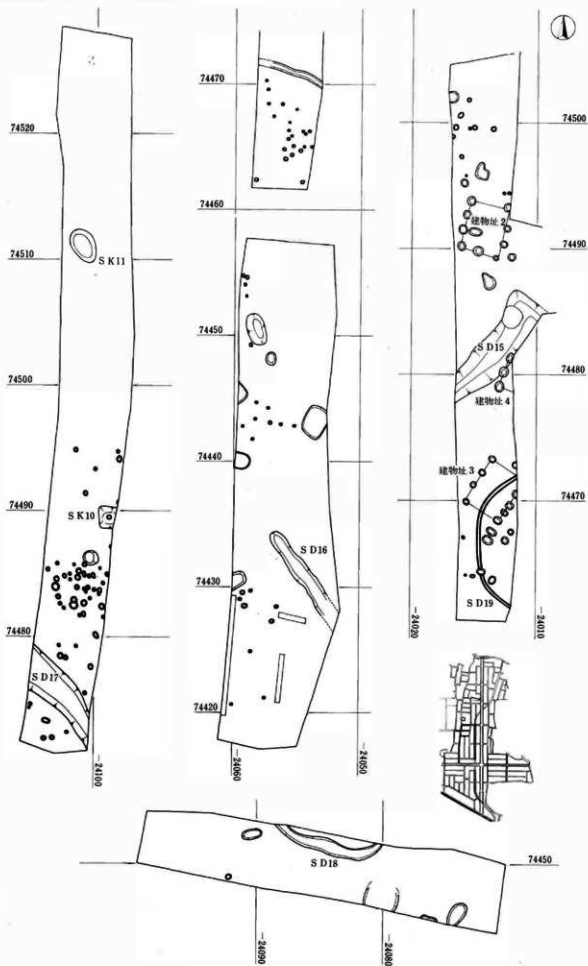


图19 本堀 (MB) 遺跡調査地点全測図② (1 : 300)

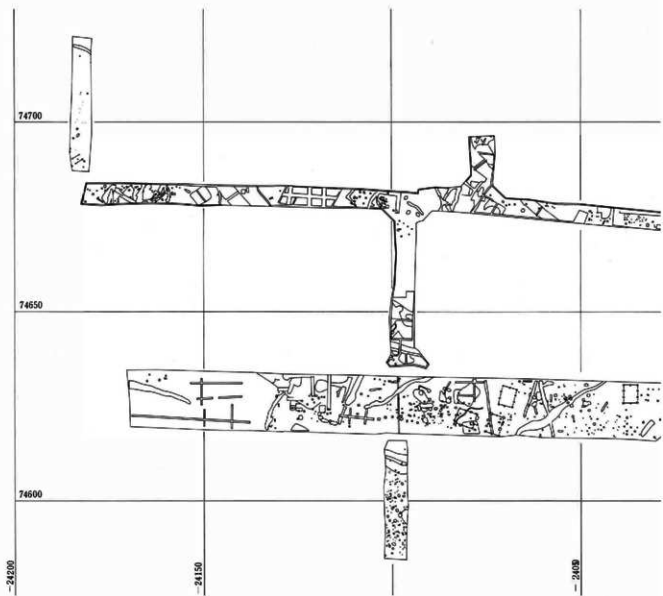


图20 柳田 (YD) 遗址调查区全测图 (1 : 1,000)

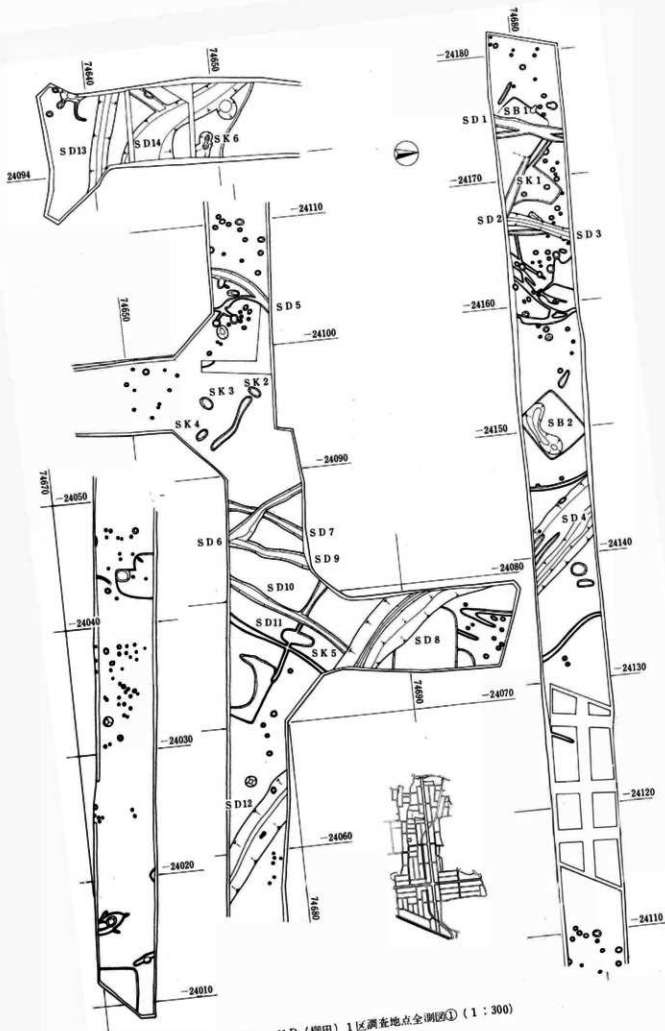


图21 YD(柳田)1区調査地点全測図①(1:300)

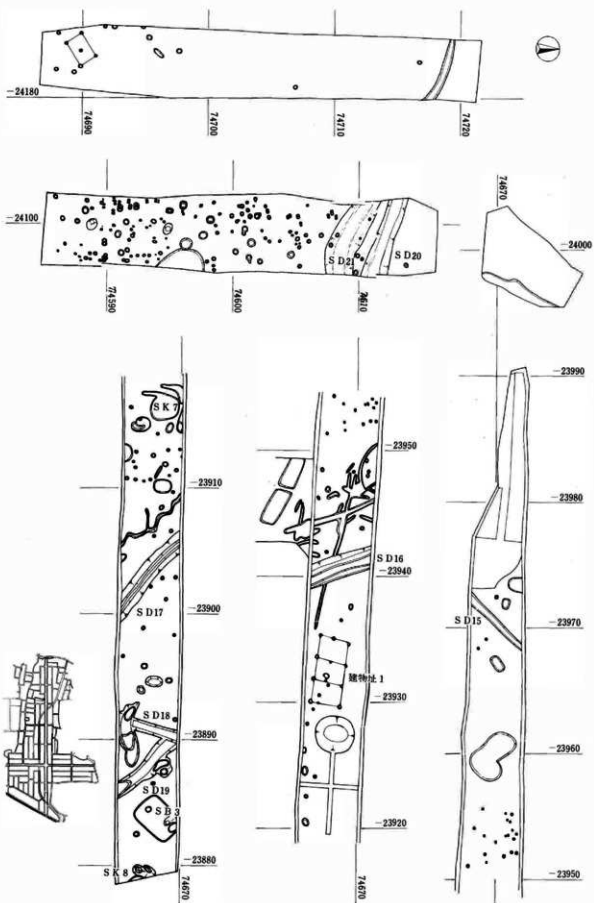


图22 YD (柳田) 1区調査地点全測図② (1:300)

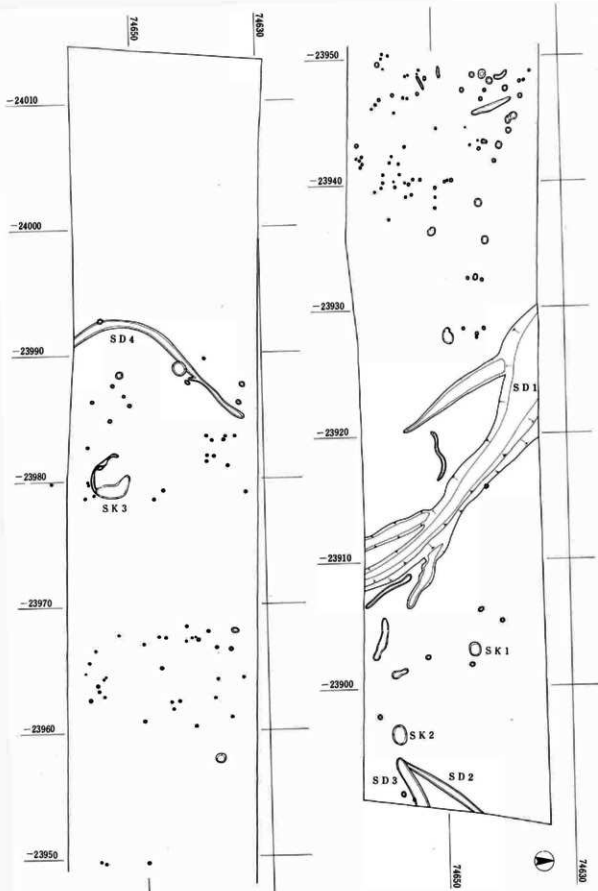


图23-① YD(柳田)2区調査地点全測図①(1:300)



图23-② YD (柳田) 2区调查地点全测图② (1:200)

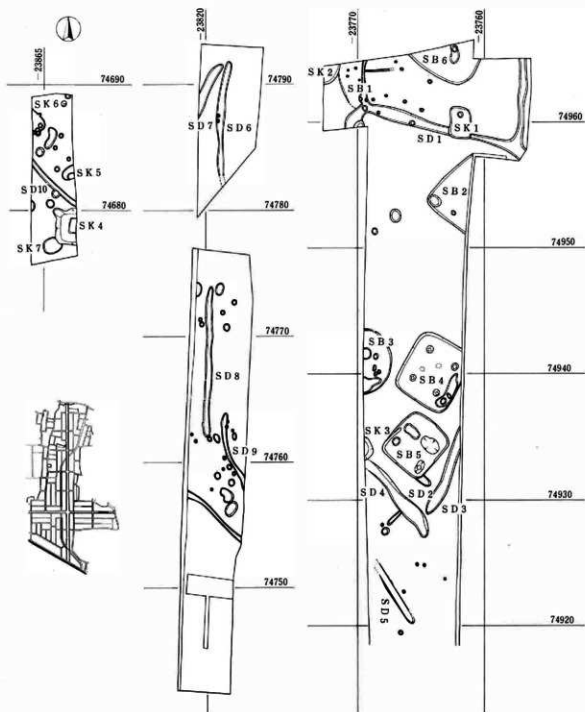


图24 YD (柳田) 3区調査地点全測図 (1 : 300)



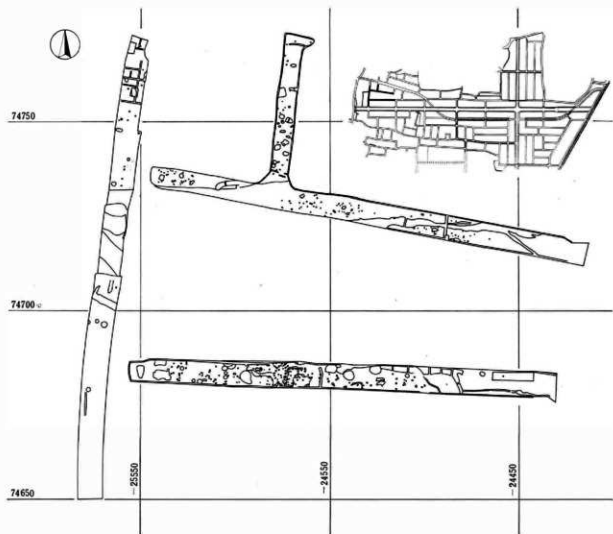


図25 稲添 (IZ) 遺跡調査区全測図 (1 : 1,000)



稲添遺跡

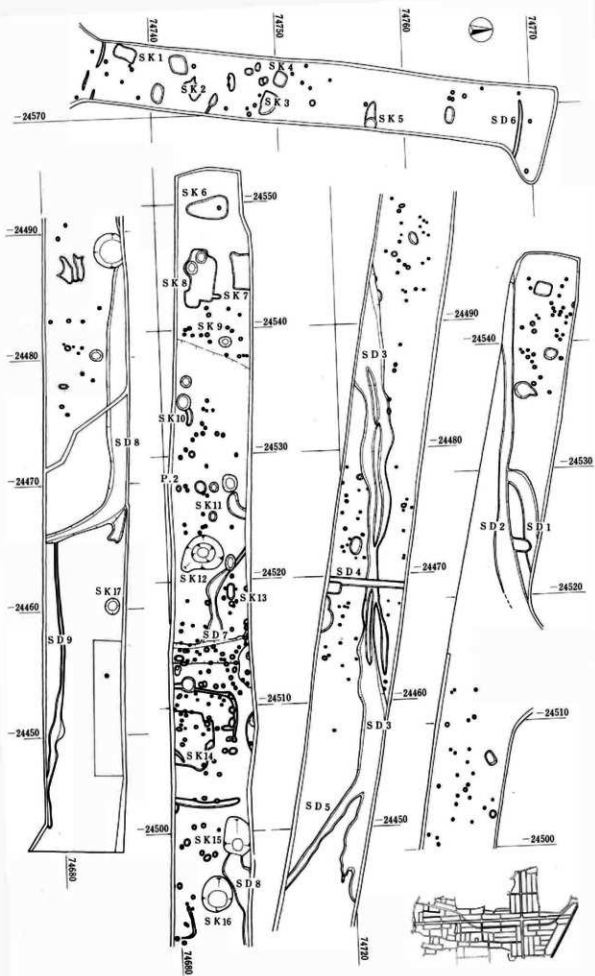


图26 桶添(IZ)遺跡調査地点全圖①(1:300)

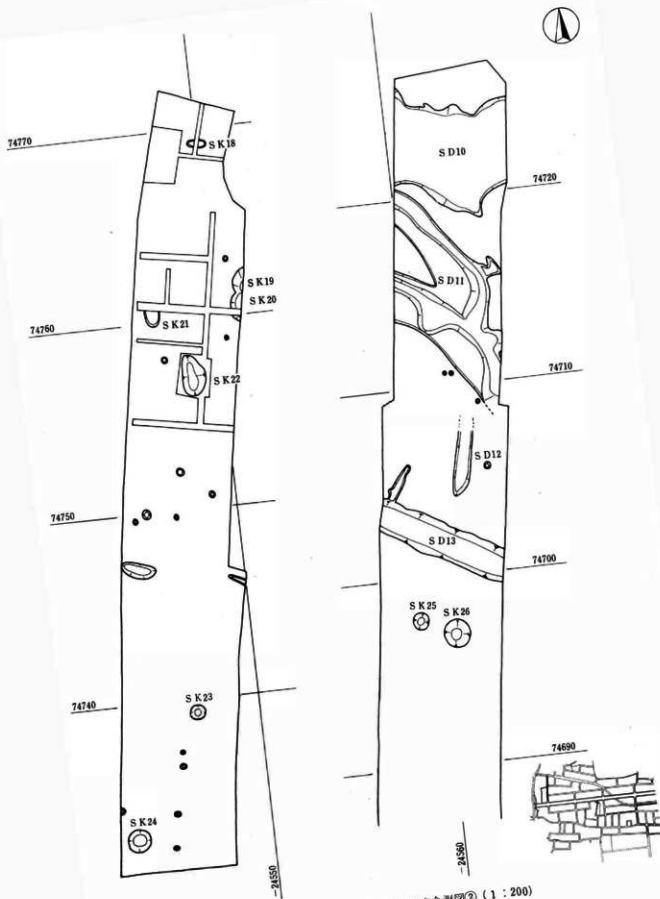


图27 福函 (IZ) 遺跡調査地点全測図② (1:200)

## 2 遺構・遺物

### 1 弥生時代中期後半

#### MB 7号住居址 (図18・28・29・30~32)

南側は調査区外となるが、住居址の約 $\frac{1}{2}$ を検出した。径約6.10mほどの円形住居址で、主柱穴はP1~P4で6本の同心円状の配列が予想される。炉は住居址中央に、約20cmほどの深さの地床炉が設けられている。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであったが、住居址中央部分はやや固く締まっていた。北側壁際に、多量の土器群が床面に接した状態で出土している。また土器と反対側の東寄りの壁際より、土器の製作用かと考えられる人頭大の粘土塊が、これも床面に接した状態で3塊出土している。

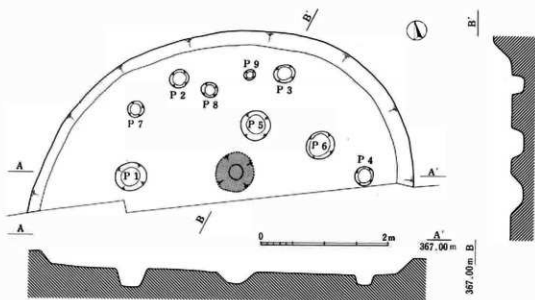


図28 MB 7号住居址実測図(1:60)

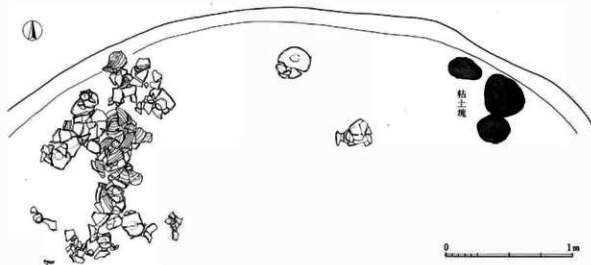


図29 MB 7号住居址土器出土状況実測図(1:30)



MB 7号住居址遺物出土状況



MB 7号住居址

MB7号住居址  
土器出土状況



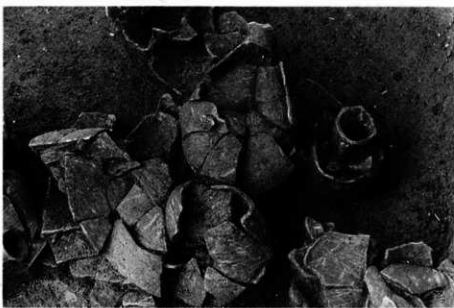
同・土器出土状況



同・土器出土状況



MB7号住居址  
土器出土状况



同・土器出土状况



同・粘土塊出土状况



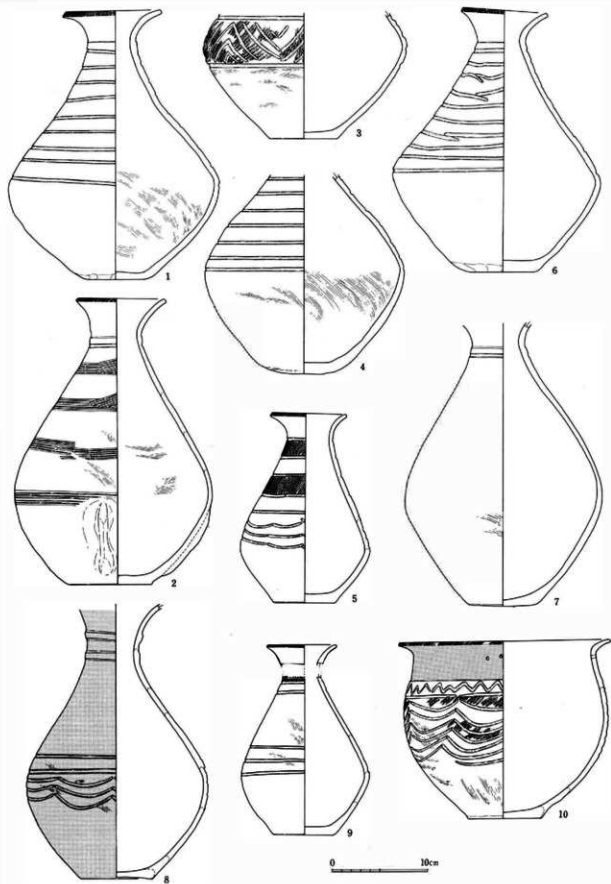


图30 MB 7号住居址出土土器实例图①



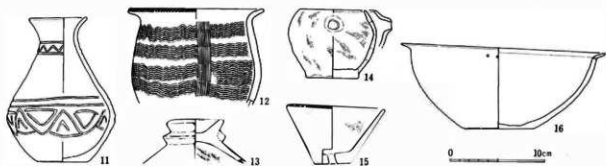


图31 MB 7号住居址出土土器実例②

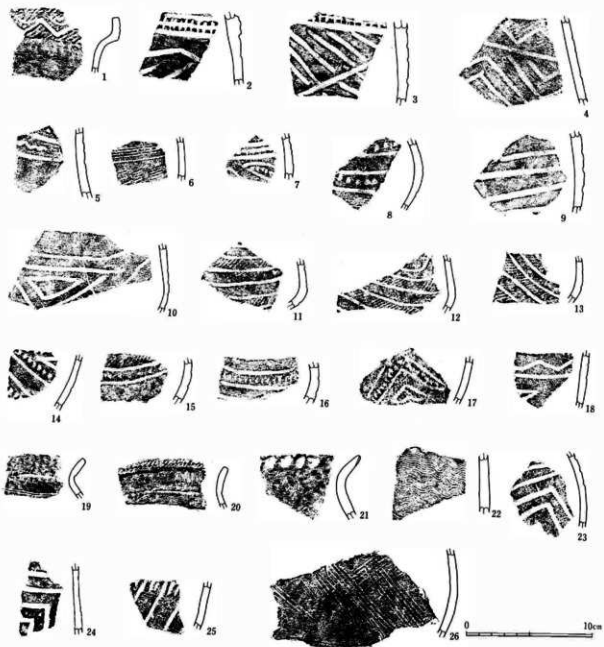


图32 MB 7号住居址出土土器拓影



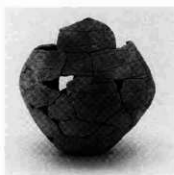
MB7号住居址 No.1



同・No.2



同・No.3



同・No.4



同・No.6



同・No.7



MB7号住居址 No.5



同・No.10



同・No.14



同・No.15



MB6号住居址 No.1



同・No.7

出土土器には壺(1~9・11)、短頸壺(10)、甕(12)、注口土器(14)、坏(16)、底部穿孔鉢(15)がある。壺の占める比率が高い点特殊である。あるいは住居の利用空間の問題であろうか。壺の文様は頸から胴部にかけて多段にわたる文様帯をもつが、縄文帯が少なく、無文のまま残されるものが多い点特徴的といえる。口唇部も単純に縄文を施文するのみであるが、いずれも細頸の形態である。甕(12)は区画波状文が施文されているが、波状文施文後に、縦方向の区画を施している。

### MB 6号住居址 (図18・33~35)

南側約半が調査区外となるが、径約4mほどのやや不整な円形住居址である。柱穴配置は不規則であるが、主柱穴はP1・P2を含む4本方形の配列が予想される。炉は地床炉で住居址中央に設けられ、径約50cm、深さ約10cmである。床面も軟弱で不明瞭であった。

図示した土器はいずれも覆土内からの出土である。(1)は片口を有する受口壺で、頸部には沈線区画後縄文を施文し、さらに彫描の重山形文を描く。(3)・(6)・(7)

は太頸の大型壺で、頸部から胴上部にかけて文様が施される。(6)・(7)のように多段帯状の文様帯は特徴的である。

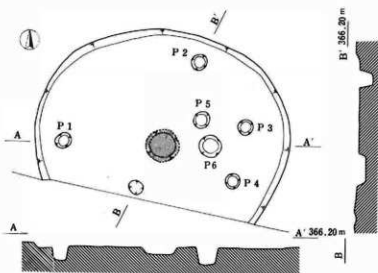


図33 MB 6号住居址実測図(1:60)

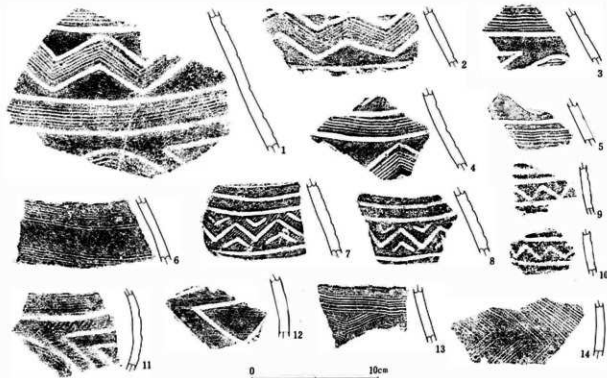
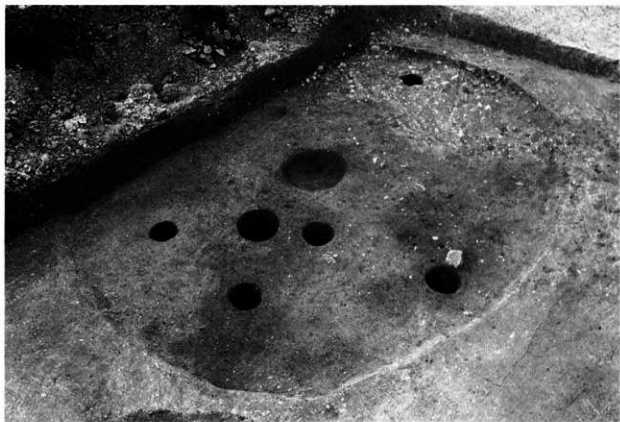


図34 MB 6号住居址出土土器拓影



MB 6 号住居址土器出土状况



MB 6 号住居址

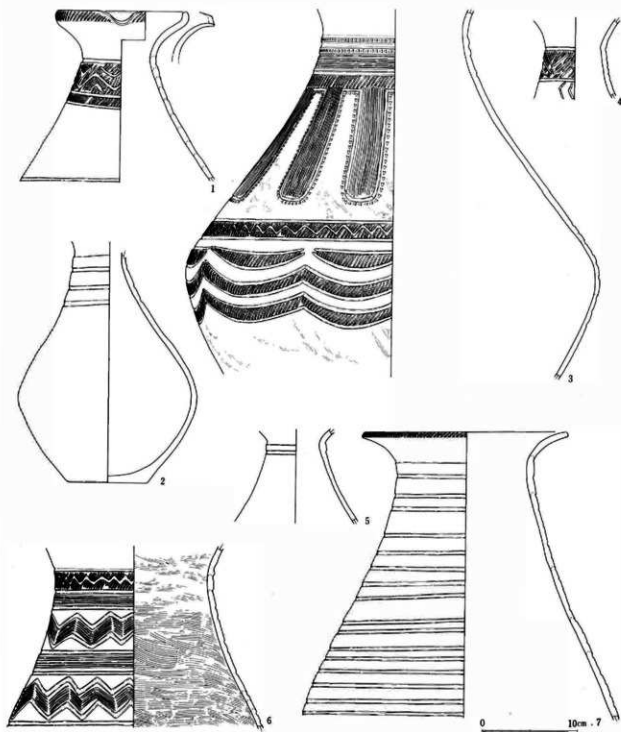


図35 MB 6号住居址出土土器実測図

FM 5区16号住居址 (図14・36~40)

東側を32号・36号土壁に切られるがほぼ全掘し得た。一辺約1.80mほどの小型でやや不整な円形住居址である。主柱穴はP 1~P 4と考えられ、4本方形の配列である。壁際に存するP 5~P 7は支柱穴であろう。床面は全体に軟弱で不明瞭なものであった。炉は住居址中央やや西寄りのところに位置し、地床炉である。径30cmほどの不整な円形を呈し、深さ約10cmである。内部には炭化物・灰等が充満していた。炉の周囲から西側の壁際にかけて、床面より若干浮いた状態でかなりの量の土器が出土している。

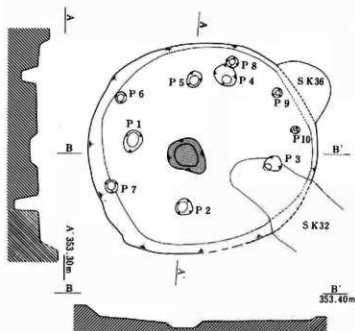


図36 FM 5区16号住居実測図(1:60)

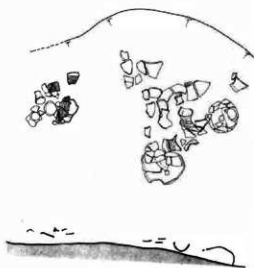


図37 同土器出土状況実測図(1:30)

図示したものには壺(1~3)・甕(4~6)・瓶(7)がある。(1)はやや太頸化の傾向がうかがわれる長頸壺で、頭~胴部が残存する。頭部には篁描直線文下に2本一組の篁状工具による重連弧文を描いており、時期的な特徴を示している。(3)は頭部に縄文帯・篁描直線・篁描波状文を施文しているが、縄文帯は地文に縄文を施文した後に、上下を沈線区画したものである。(4~6)の甕はいまだ頭部に簾状文を施文していない。ただし(4)に見るように、波状文のみ施文するものや、(5)(6)のように波状文帯の幅が増大している点等はやはり時期的には新しい特徴ととらえられようか。(6)は波状文下に単斜方向の櫛描条痕を施している。口唇部はいずれも縄文を施文するのみである。(7)の瓶は甕の転用品である。底部には焼成後の穿孔を一孔有し、また口唇部は破損面を研磨して再調整している。

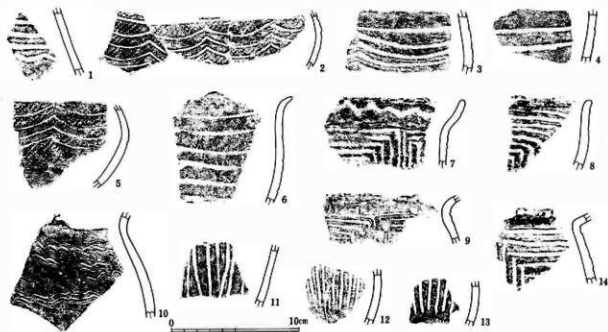


図38 FM 5区16号住居出土土器拓影①



FM 5区16号住居址土器出土状況



FM 5区16号住居址 No. 1



同・No. 2



同・No. 4



同・No. 6



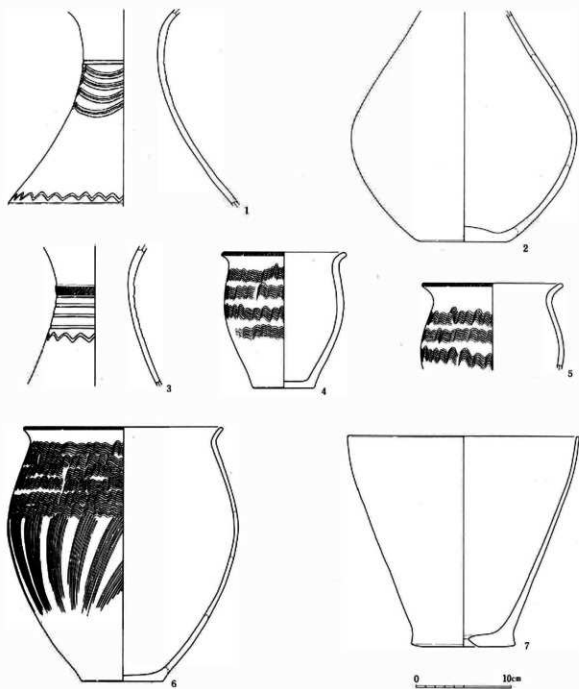


图39 FM 5区16号住居址出土土器实测图

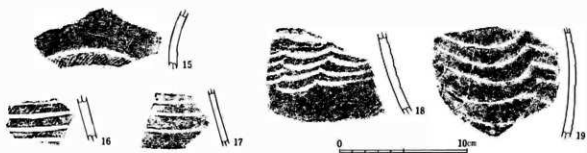


图40 FM 5区16号住居址出土土器拓影②

FM 5 区 4 号住居址 (図14・41・42)

住居址西側は調査区外となり、約 $\frac{1}{2}$ を検出したにすぎない。一辺約2.60mの円形住居址である。主柱穴はP1～P3と考えられ、6本同心円状の配列が予想される。P4・P5は支柱穴であろう。住居址北側の壁際には、幅平均20cm、深さ10cmほどの壁周溝が確認されている。床面は中央付近は比較的固く締まっていたが、壁際にいくにしたがい次第に不明瞭なものとなる。炉は住居址中央やや南西よりのところにあり、地床炉である。約 $\frac{1}{2}$ 程調査できたにすぎないが、径約45cm、深さ15cmを測る。内部より壺(2)・甕(5)が出土したほか、多量の炭化物が検出されている。壺(1・2)・短頸壺(4)・高坏(3)・甕(5)が出土しているが、炉内より出土した(2)(5)を除き他はすべて覆土内よりの出土である。(1)は口唇に推定4個の山形突起を付し、頸部には篋編直線を施す。(4)の短頸壺は口唇に縄文を施文するのみであるが内面は篋磨きが成され甕と判断した。甕(5)は頸部に波状文を施文した後、縦羽状文を施文する。

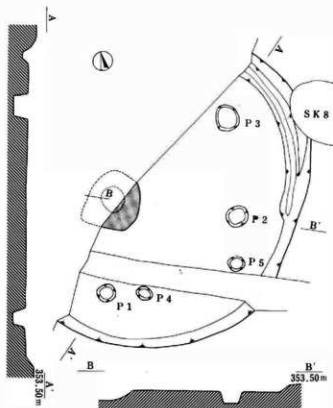


図41 FM 5 区 4 号住居址実測図(1:60)

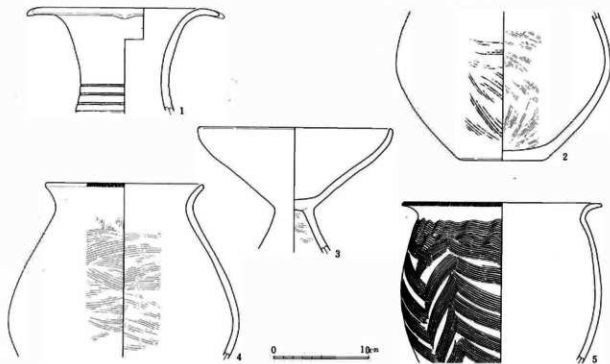


図42 FM 5 区 4 号住居址出土土器実測図(1:4)

MB16号溝址 (図19・43~49)

南東から北西方向へ直線的に伸びる形態の溝址で、長さ約7.50m程を検出したが、南側は調査区外となる。確認面での幅は平均1.30m、溝底幅は平均60cmで、断面形は逆台形を呈する。覆土は大きく2層に分かれるが、上層は大部分が擾乱によって破壊されており、詳細は不明である。検出状況から周溝墓等の可能性も考えられたため、周辺にかなり綿密なトレンチ調査を行なったが、本溝址との関連が予想されるものは検出されていない。

本溝址からは溝底に接する状態、もしくはやや浮いた状態で多量の土器群が出土している。出土土器の様相に明確な時期的差異は認められず、その出土状況からもこれらは一括投棄されたものと考えられる。

出土土器は壺(1~28)・甕(29~50)・鉢(51~53)・坏(55・56)・短頸壺(57)・高坏(58)がある。壺は容量から大型(25・28)・中型(1・2・16・18等)・小型(13~15等)に分けられ、さらに頸部の形態によりそれぞれ太頸壺(25~28)・細頸壺(1~24)に分類できる。

文様はa類：頸部から胴上半部に多段帯状の文様を持つもの(1・5・13・18・19・25)、b類：頸部から胴上半部を文様帯とするが懸垂文が描かれるもの(16・17)、c類：文様帯が頸部と胴部の二つに分離するもの(12・14)もしくは文様帯が頸部文様帯にのみ集約するもの(21等)、D類：無文のもの(8・15)に分類できる。各類とも縄文帯は沈線区画後に縄文を充填することによって構成される。口唇部は篋状工具による刻みを施すのみのもの(2・8・12・13)、縄文施文後篋状工具による刻みを施すもの(3)、指頭によるツマミ上げを行なうもの(25)、縄文を施文するのみのものがある。(28)の受け口壺は頸部に指頭による円文を施しており、あるいは阿島式土器との関連が考えられるかもしれない。また(13・14)は胴部下半にそれぞれ焼成後の穿孔を一孔行する。甕は容量の面から大・中・小の3者に分類でき、胴部文様からはa類：横羽状文系(29~35)、b類：縦羽状文系(36~42)、c類：波状文系(44~49)、d類：無文(43)に分類できよう。a類が比較的少量に残存しており時期的な特徴を示すものととらえられよう。a~c類いずれも頸部文様は波状文か直線文で、いまだ麻状文は出現していない。胴部文様下端を篋による刺突や刻みで区画する手法は(47)に認められるだけで、もはや主体的たり得ぬのも特徴であろうか。c類の中でも(45・46)は波状文と直線文を交互に施文するもので、従来あまり認められない文様であるが、あるいは他地域からの影響とも考えられようか。口唇部は縄文施文後に指頭によるツマミ上げを行なうものが多く、これも一つの特徴と考えられよう。器面の整形は外面胴下半ならびに内面を篋磨きすることを基本とする。(50・51・53)等は鉢としてあつかったが従来あまり良好な資料はなく、性格不明な部分が多い。(53)は内面に篋磨きが行なわれており用途等今後の検討課題であろう。鉢(52)、坏(56)、高坏(58)等は内外面とも篋磨き・赤彩されている。

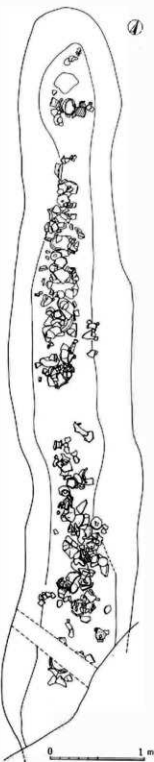


図43 MB16号溝址土器出土状況実測図(1:4)



MB16号溝址



MB16号溝址土器出土狀況

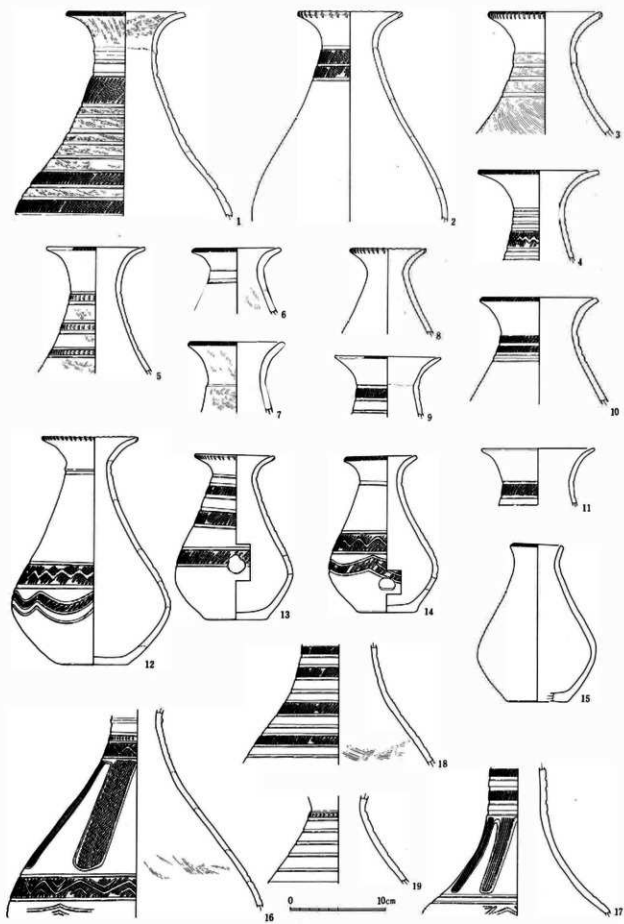


图44 MB16号遗址出土土器实例①

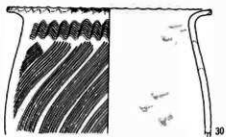
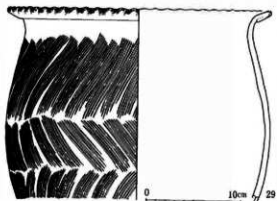
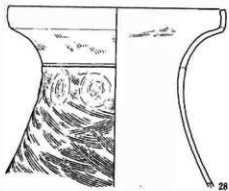
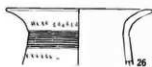
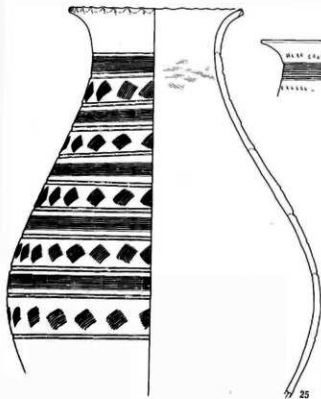
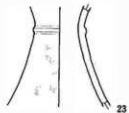
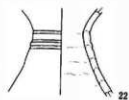
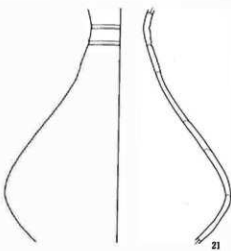
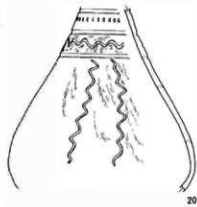


图45 MB16号沟址出土土器实例图②

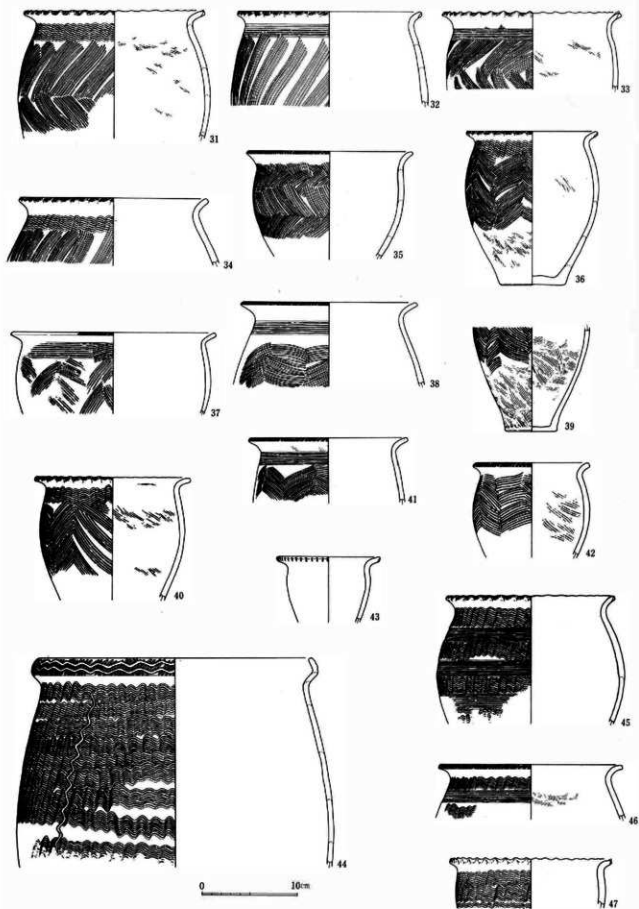


图46 MB 16号沟址出土土器实例(四)

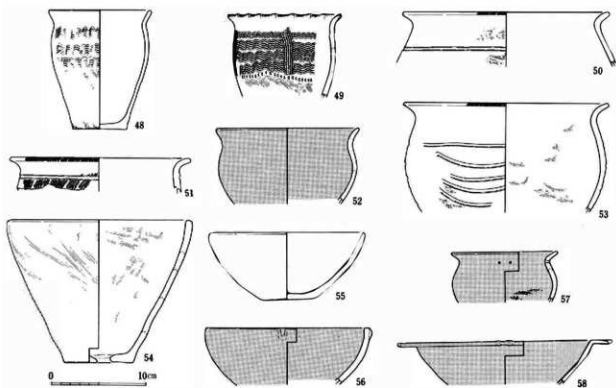


图47 MB 16号溝址出土土器实测图④

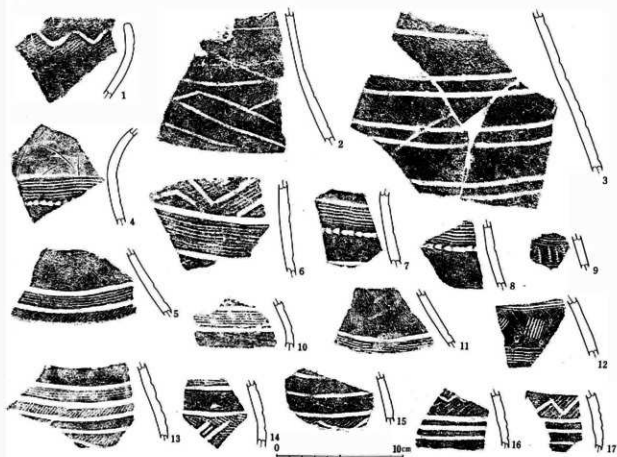


图48 MB 16号溝址出土土器拓影①



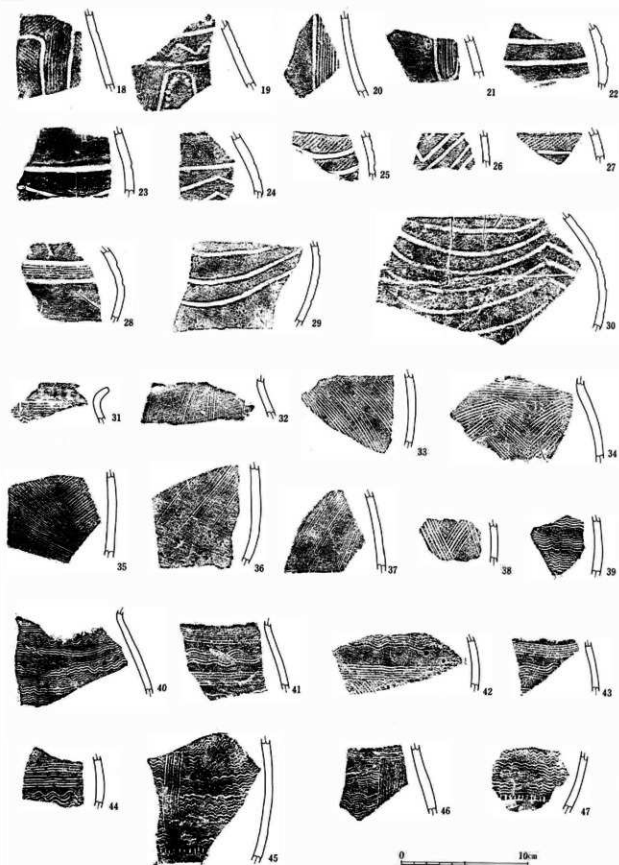


图49 M B 16号清址出土土器拓影②



No.25



No.12



No.16



No.28



No.13



No.14



No.15



No. 3



No.20



No.36



No.29



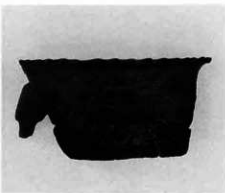
No.44



No.40



No.35



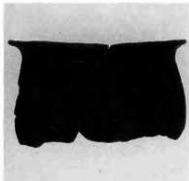
No.33



No.31



No.45



No.46

MB15号溝址 (図19・50～55)

長さ約10m程を検出したが、東側と西側はそれぞれ調査区外となり、また一部を建物跡4に切られる。南西から北東方向に直線的に伸びた後はほぼ直角に近く曲がる状態を取るが、限られた調査範囲からは詳細は不明である。確認面での幅平均2.50m、溝底幅1.50m、深さ1.20mで断面逆台形状を呈する。溝址北端付近に土塊状の落ち込みが確認されたが性格は不明である。出土した土器の大半はこの落ち込み内部より出土している。土器の出土状況はいずれも比較的細かく破砕された状況であり、完形に近い土器を大量に出土したMB16号溝址とはやや性格が異なるようである。

出土土器には壺(1～11)・甕(12～20)・鉢(21～23)がある。壺はその全容を知りうるものが出土していないが頸部文様の縄文帯、沈線区画後縄文が充填されるものが多数を占めるようである。口唇部は縄文を施文するのみのものと、縄文施文後指頭によるツمامミ上げを施すもの(1～3)が存在する。(9)のように頸部から胴部にかけて多段帯状の文様帯を施すものや、(5)のように懸垂文を施文するものも存在する。甕は中型品と小型品であるが、胴部文様からは16号溝址と同様に分類できる。a類：横羽状文系(14・16)、b類：縦羽状文系(13・15・18)、c類：波状文系(17・19)、d類：無文(20)である。(12)は胴上半に斜格子子を施文する。口唇部は縄文施文後に指頭によるツمامミ上げを施すものが多い点特徴的である。(16)は口縁に最大径を持つ深鉢型の器形を呈する特異なものである。(19)は区画波状文を施文するが、波状文施文後に縦方向の区画を施している。(20)は無文であるが、ハケ整形後外面は胴下半を、内面は全体に丁寧に荒磨き整形している。鉢(21)は口唇に4個の突起を付し(22)は二孔一対の繫縛孔を持つ。(23)は口縁が水平に近く折れる形態を呈する。鉢類はいずれも荒磨き・赤彩される。これらの資料はMB16号溝址出土土器と大きな時間的差異は認められない。



図50 MB15号溝址土器出土状況実測図(1:30)

M15号溝墓土器出土状況

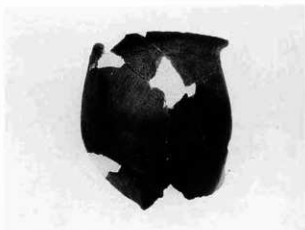


M15号溝墓





MB15号溝址土器出土状況



MB15号溝址出土土器 No.14



No.19



No.20



No.21



No.22

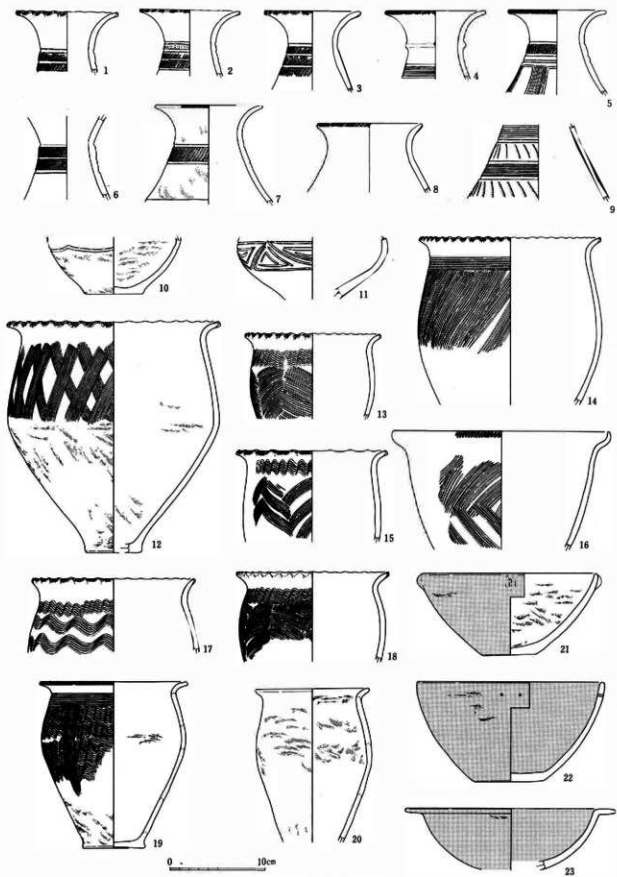


图51 MB 15号溝址出土土器实测图

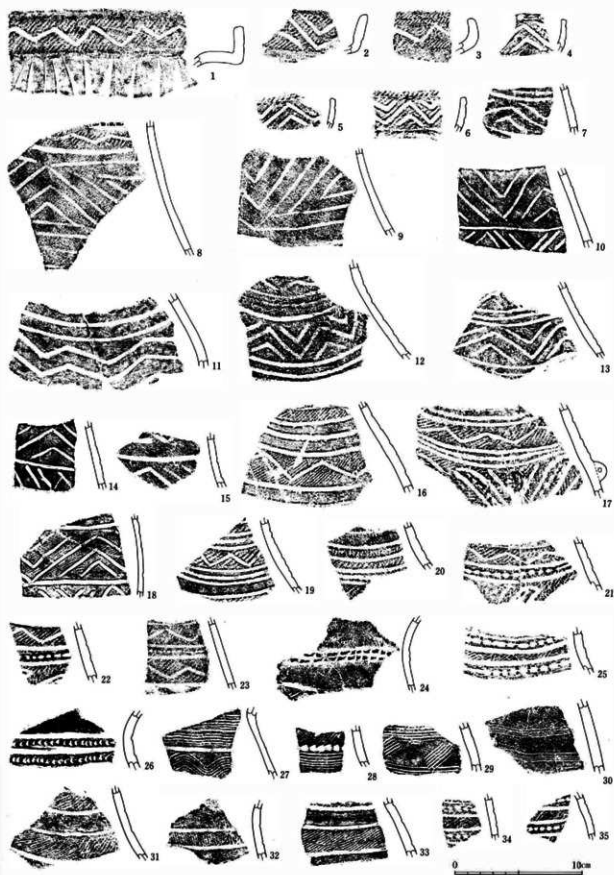


图52 MB15号遗址出土土器拓影①



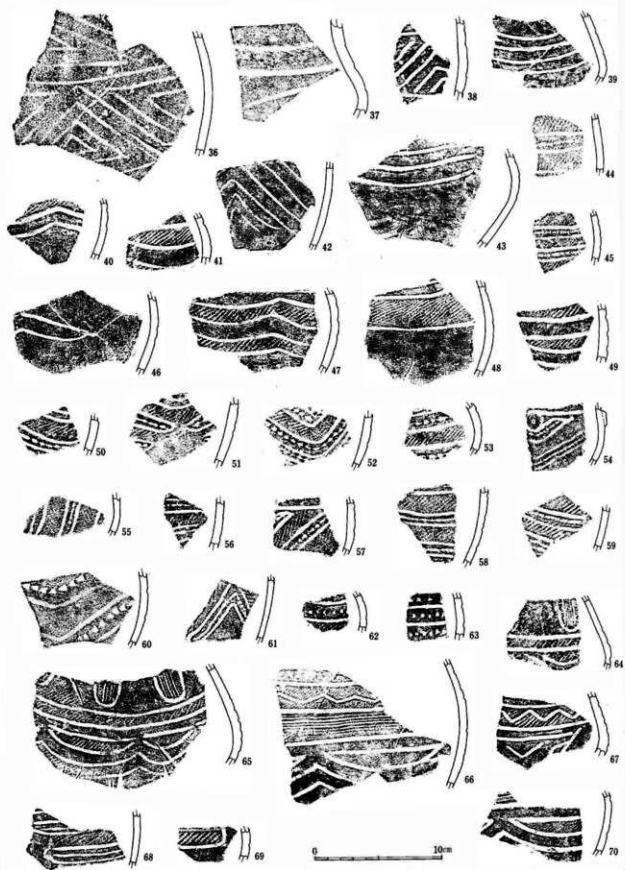


图53 MB 15号冢址出土土器拓影②

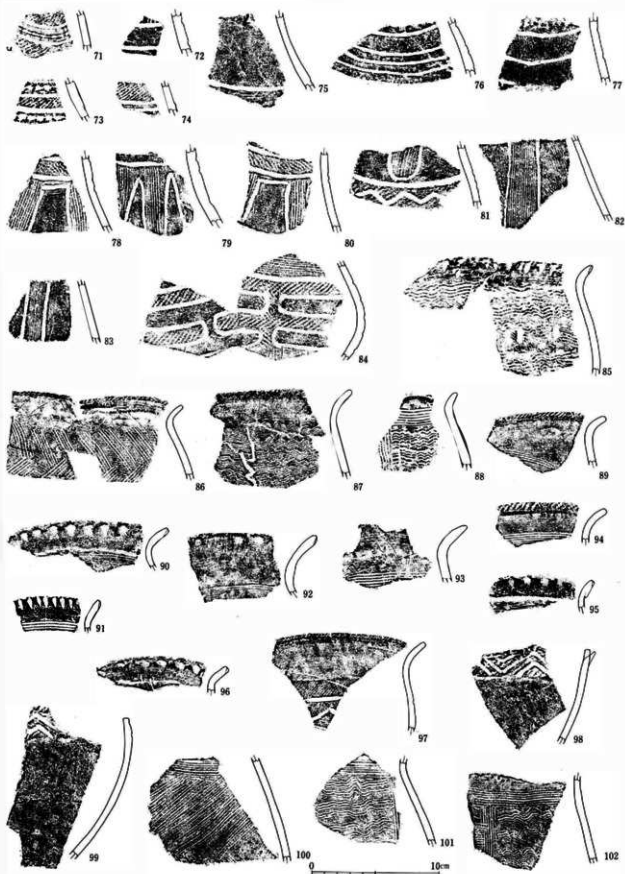


图54 MB15号遗址出土土器拓影③

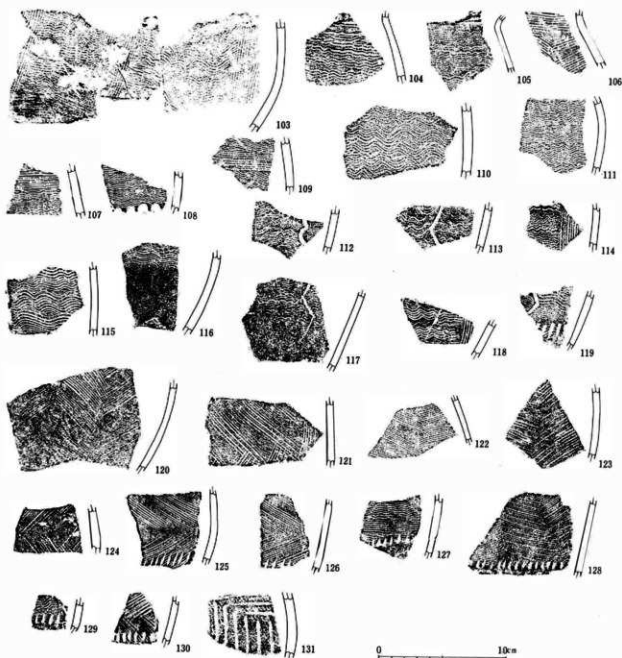


図55 MB15号溝址出土土器拓影④

## 2 弥生時代後期

### FM5区 12号住居址 (図14・56～59)

南東隅が若干調査区外となるがほぼ全掘し得た住居址で、短軸4.60m、長軸6.20mの奥壁がやや張りだす隅丸方形を呈する。主柱穴はP1・P3～P5の4本が考えられ、やや不整な長方形配列となる。P2は住居址中心軸上に位置する支柱穴であろう。P7とP8は対をなし、その間に位置するP6と共に出入り口施設に関連するものである可能性が高い。出土土器には壺と甕がある。壺頸部文様はいまだ挿描T字文が認められず、直線文(1)、匱切りT字文(2)、波状文(3)などが描かれる。また口縁部外面は艶磨き整形されるものの赤彩はな

されない。壁の特徴としては口縁部に文様を施文せず、無文帯として残しているものが多い点上げられよう(4-7)。いずれも口縁部は強い横なでがなされるのみで、頸部には等間隔止めの簾状文、胸部には波状文が施文される。(8)(10)は口縁部にも波状文が施文されるが(10)は胴部に粗い縦羽状文を施文している。

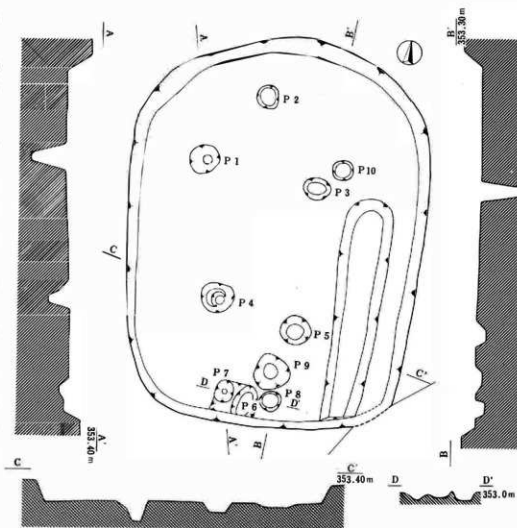


図56 FM5区12号住居址実測図(1:60)

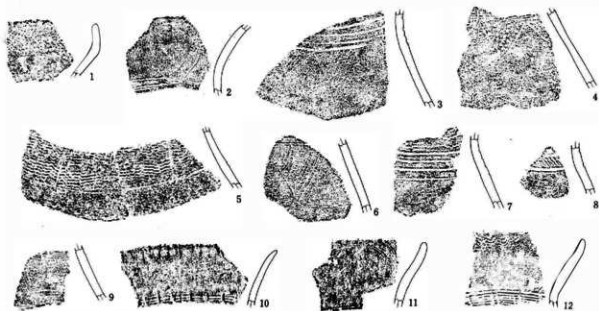
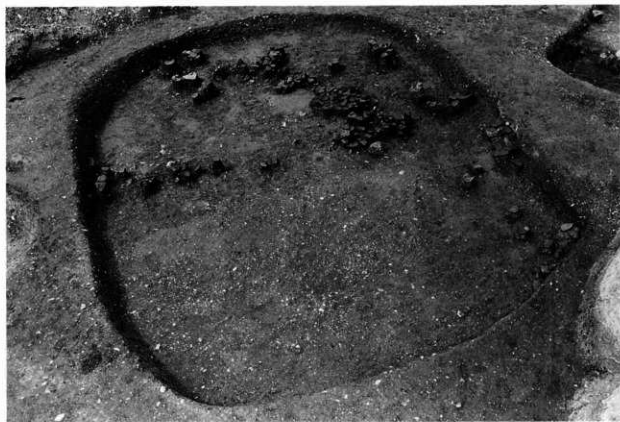


図57 FM5区12号住居址出土土器拓影①(1:3)



FM 5区12号住居址



FM 5区12号住居址土器出土状况

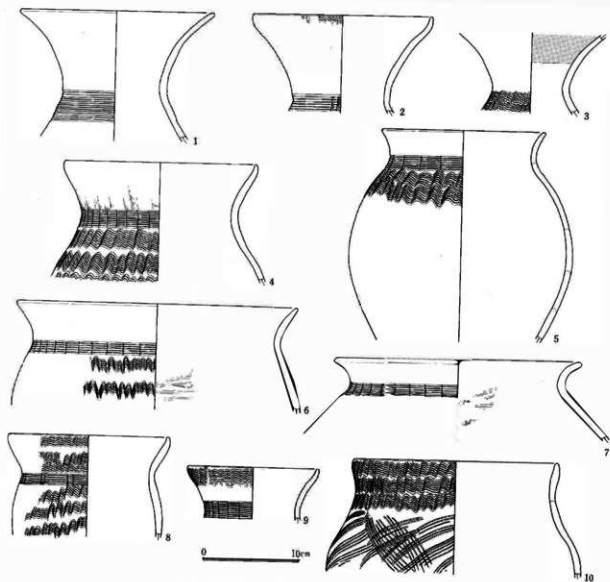


图58 FM 5区12号住居址出土土器实测图(1:4)

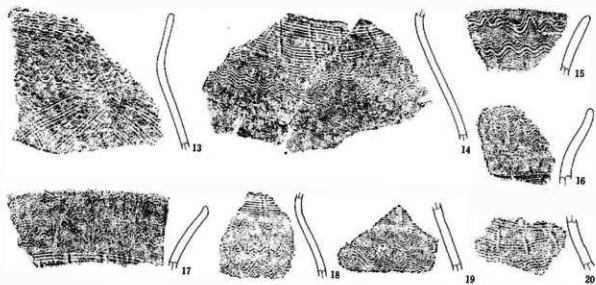


图59 FM 5区12号住居址出土土器拓影②(1:3)

FM 5 区 15号住居址 (図14・60・61)

短軸3.60m、長軸5.00mの隅丸長方形住居址である。東壁の一部を12号土壌に切られ、南壁部分はトレンチによって破壊してしまった。支柱はP1～P4が想定され、4本の長方形配列である。炉は住居址中央やや奥壁際のところであり、地床炉である。長径約70cmほどの楕円形を呈し、深さ10cm程である。内部より焼土、炭化物が検出されているが、さほど焼き締まった状況ではなかった。図示した土器は奥壁際より床面に接した状態で出土したものである。甕は(3)のような口縁部に無文帯を残すものもあるが基本的には(1)(2)のように口縁部に液状文を充填する後期型の甕が確立している。高坏は口縁部がツバ状に屈曲する水平口縁のものが2個体出土している(4・5)。共に水平口縁部は前代に比べて矮小化しており、時間的後出性を示すものととらえられよう。(5)の坏部と脚部の接合はホゾによる接合がなされている。外面ならびに坏部内面は共に磨き・赤彩される。

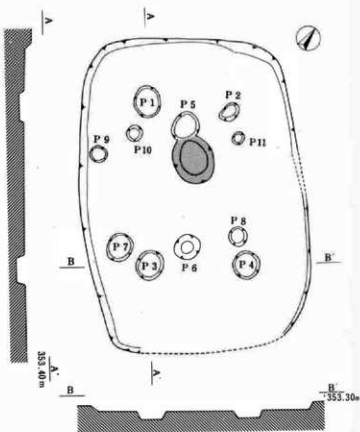


図60 FM 5 区15号住居址実測図(1:60)

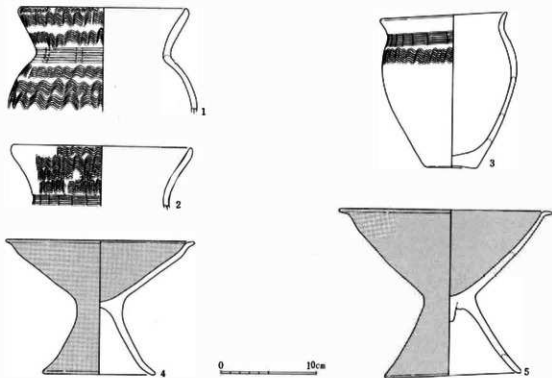


図61 FM 5 区15号住居址出土土器実測図(1:4)



FM 5区15号住居址土器出土状况



No. 1



No. 3



No. 5



No. 4



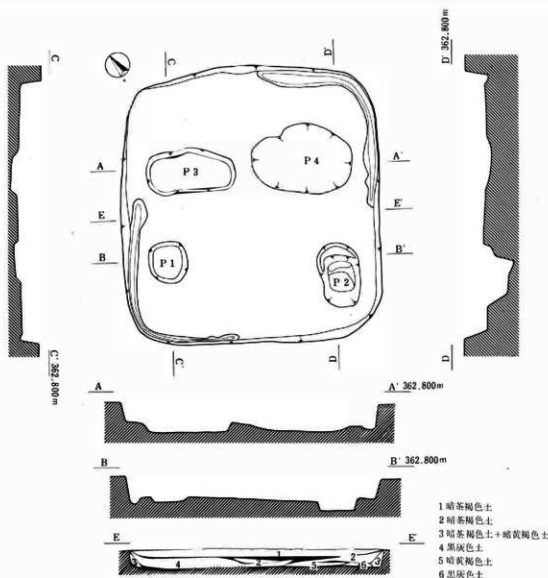


図62 YD3区5号住居址実測図(1:60)

### 3 古墳時代前期

#### YD3区 5号住居址 (図24・62~65)

一辺4.20mの隅丸方形住居址である。P1・P2は主柱穴と考えられるが対になると考えられたP3・P4ははっきりしない落ち込み状となり詳細不明である。おそらく4本の方形配列が予想される。床面は全体に軟弱で不明瞭であった。炉はP3とP4の中央付近に焼土が若干存在したが明確ではない。東壁と西壁の対になる部分は壁周溝が巡る。幅20cm、深さ10cm程で全周はしない。

図63に示した如く、本住居址からは多量の炭化材と土器群が出土している。土器群は炭化材層の上と下によってそれぞれ上層(14~21)と下層(1~13)に分離できる。下層出土遺物は住居址南隅より一括して出土したもので、ほぼ床面直上より出土している。その出土状況はあたかも棚の上に置かれていた土器群が一時に落下したかのような状況である。時期的には布留2式期に並行する良好な一括資料といえよう。上層出土土器としたものはいずれも炭化材の上に乗った状況で出土したもので下層出土の土器よりもその様相は後出性を示している。住居廃絶後に投棄されたものである可能性が高い。